

前津柳ノ内遺跡

福岡県筑後市大字前津所在遺跡の調査

筑後市文化財調査報告書

第55集

2004

筑後市教育委員会

まえ づやなぎの うち い せき
前津柳ノ内遺跡

まえ づやなぎの うち
前津柳ノ内遺跡第1次調査

まえ づやなぎの うち
前津柳ノ内遺跡第2次調査

2004
筑後市教育委員会

序

本書は、平成13・14年度に行った前津柳ノ内遺跡の埋蔵文化財調査報告書であります。

当市を横断する国道442号を新設する工事に伴う緊急発掘調査で得られた成果を報告しております。

前津地区一帯では古くから先人達の残した生活の痕跡が発掘調査で明らかになっており、今回の調査でも縄文時代から近世までの筑後の人々の暮らしの一端を復元できる貴重な資料となりました。

本書を学術研究の一助として、また生涯学習や社会教育等の資料として活用いただければ幸いです。

本報告にあたり、地権者の方々、並びに八女土木事務所をはじめとする関係者各位に文化財へのご理解、ご協力を賜ったことを深く感謝申し上げます。

平成16年3月

筑後市教育委員会

教育長 城戸 一男

例　言

1. 本書は平成13・14年度に筑後市教育委員会が行った前津柳ノ内遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。平成13年度が前津柳ノ内遺跡第1次調査、14年度が前津柳ノ内遺跡2次調査である。
2. 発掘調査及び出土遺物の整理は筑後市教育委員会が行った。出土遺物・図面・写真等は筑後市教育委員会で収蔵、保管している。発掘調査及び整理作業の関係者は第Ⅰ章に記している。
3. 本書に使用した図面の遺構実測図は1次を上村英士、2次を柴田剛、横井理絵、佐々木寿代が作成し、遺物の実測、浄書は1・2次共に横井、仲文恵、佐々木、福井円が行った。
4. 本書に使用した遺構・遺物の写真撮影は1次を上村、2次を柴田が行った。
5. 今回の調査に用いた測量座標は、国土調査法第II座標系を基準としており、方位は全て座標北(G.N)である。
6. 本書に使用した遺構の表示は以下の略号による。
SD-溝 SK-土壤 SP-ピット SX-不明遺構
また、本文中の「○×○」の表記については両方の可能性があるという意味である。
7. 本書の執筆・編集は上村が行った。

目　次

I. 調査経過と組織	1
II. 位置と環境	2
III. 調査成果	3
前津柳ノ内遺跡第1次調査	3
前津柳ノ内遺跡第2次調査	15
IV. まとめ	44

写真図版

I. 調査経過と組織

前津柳ノ内遺跡は筑後市大字前津字柳ノ内に所在し、隣市である八女市と複雑な境界を有する地点である。(Fig. 2) 発掘調査に至る経過は、平成12年に開発原因者である国土交通省から福岡県八女土木事務所を通じて国道442号バイパス建設予定地の埋蔵文化財の取り扱いについて福岡県南筑後教育事務所に照会があり、試掘調査を行った。試掘の結果、埋蔵文化財の存在が認められたため、発掘調査を行う旨を伝えられた。平成13年度に福岡県南教育事務所から筑後市教育委員会に予定地の埋蔵文化財発掘調査について依頼があり、市教委が行うことで合意した。調査は平成13年度分を第1次調査、平成14年度分を第2次調査として行っている。整理及び報告書作成については、平成13年度から15年度にかけて筑後市文化財整理室にて行った。

なお、発掘調査及び整理作業の関係者は次のとおりである。

調査組織

1) 平成12年度（試掘調査）

福岡県南教育事務所

生涯学習課 技術主査 小田和利（試掘担当）

2) 平成13年度～平成14年度（発掘調査）

筑後市教育委員会

総括	教育長	牟田口和良
	教育部長	下川雅晴
庶務	社会教育課長	松永盛四郎
	文化係長	成清平和
	文化係	永見秀徳（事前審査担当） 小林勇作
		柴田剛（第2次調査担当） 立石真二
		上村英士（第1次調査担当）

4) 平成15年度（報告書作成）

総括	教育長	牟田口和良（～9月30日） 城戸一男（10月1日～）
	教育部長	菰原修
庶務	社会教育課長	松永盛四郎
	文化・スポーツ係長	成清平和
	文化・スポーツ係	永見秀徳 小林勇作 立石真二 上村英士（報告書担当）

5) 発掘調査参加者

地元有志

6) 整理作業参加者

整理補助員 平塚あけみ 仲文恵
整理作業員 野間口靖子 湯川琴美 野口晴香 横井理絵 妹川玲子 佐々木寿代 福井円

尚、調査及び整理に際しては次の方にご指導、ご教示を賜った。記して心より感謝申し上げます。（順不同、敬称略）

小田和利（九州歴史資料館）、小川泰樹（福岡県南教育事務所）、赤崎敏男、中川寿賀子、大塚恵治（八女市教育委員会）

II. 位置と環境

筑後市は福岡県の南西部、筑後平野の中央部に位置する。市域をJR鹿児島本線と国道209号が縦断し、国道442号が横断する。また、市南部には一級河川の矢部川、中央部には山ノ井川や花宗川、北部には倉目川が西流する。市北部には耳納山地から派生する八女丘陵が西に延び、灌溉用の溜池が点在する。低位扇状地である東部や、低地である南西部には農業水路が発達している。当市は県内有数の農業地帯であり、北部の丘陵地域では果樹園や茶畠、東部や南西部では米麦中心の田園地帯が広がる。市街地は、国道に沿って市の中心部に形成されている。



Fig. 1 調査地点位置図 (1/25000)

III. 調査成果

前津柳ノ内遺跡第1次調査

(1) はじめに

調査地は筑後市大字前津字柳ノ内に所在し、八女市との市境に位置している。調査は現況道路が存在するため拡幅新設される北側部分から行うこととなり、排土置き場の関係上、4分割（A区～D区）の調査区設定を行った。調査期間は平成13年10月11日から平成14年1月31日迄である。調査は上村英士が担当した。

調査区は標高約17m程の低位丘陵端部であり、北側は東西に八女丘陵が延びる。また、当地は昭和40年代後半から昭和50年代に圃場整備事業で農地改良が行われており、試掘調査でもその痕跡を確認しているが、遺構・遺物は圃場整備前の床土下で検出している。層位模式や遺構・遺物の報告は各地区毎に掲載する。



Fig. 2 調査地点位置図 (1/3000)

(1) 検出遺構

A区

調査区東側は八女市との境界に位置し、現況は標高約18m程の梨畑であった。畠土下には約0.8mから約1m程度の圃場整備の際の盛り土が確認できる。盛り土下で暗黒色土、淡茶褐色土を検出し、その下から黄褐色の地山を確認し、その地山を切り込む形で遺構を検出している。

盛り土
暗黒色土
淡茶褐色土
淡黄褐色土(地山)

Fig. 3 A区土層模式図

溝

SD001 (Fig. 4, Pla. 2・3)

調査区を東西に走り、西側で北西に折れ曲がる溝である。検出長約47mを測り、幅は約0.3mから2.23mと安定しない。中央西寄りで幅が広くなり溜まり状の形状を呈する。深さは約0.04mから0.46mを測り、断面はU字状を呈する。土層観察から溝は掘り直し（浚渫）が行われていたと考えられ、圃場整備前の旧水路であった可能性がある。遺物は弥生土器甕片、須恵器甕片、土師器環×皿片、土鍋片、白磁皿片、青磁碗片、染付椀片、陶器壺、甕、擂り鉢片、鉄製品、瓦片を出土している。

土壙

SK004 (Fig. 4)

A区の最西端で検出した略長方形の土壙である。検出長軸約2.17m、短軸約1.33m、最大深さ約0.13mを測る。壙底の地山は硬く締められており、埋土は暗黒色土であるが、地山に近似した淡黄褐色の硬質ブロックも混入している。遺物は土師器環×皿片を出土している。

SK005 (Fig. 6)

A区の西側で検出した土壙で、S-3との切り合い関係は不明である。検出長軸約1.48m、短軸約1.09m、最大深さ約0.14mを測り、楕円形を呈する。遺物は弥生土器台片、土師器土鍋片、甕片、染付片を出土している。

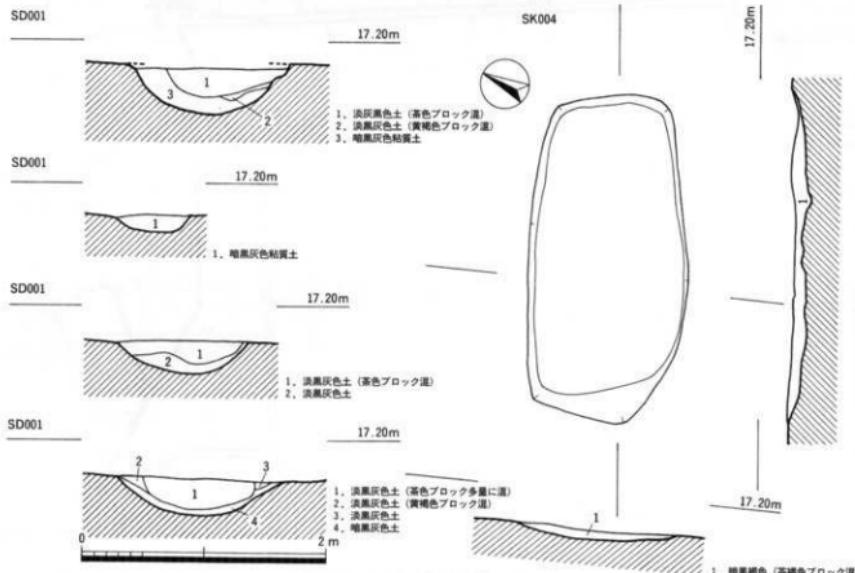


Fig. 4 SD001, SK004実測図 土層図 (1/40)



Fig. 5 前津柳ノ内遺跡第1次調査 遺構略測図 (1/600)

旧→新

S-番号	遺構番号	備考	地区	S-番号	遺構番号	備考	地区
1	SD001	溝	A区	60	SP060	ピット	B区
2		溝	A区	65	SP065	ピット	B区
3		溝?	A区	100	SD100	溝	C区
4	SK004	土壤	A区	101		ピット	C区
5	SK005	土壤	A区	150	SK150	土壤	D区
50	SD050	溝	B区	155	SD155	溝	D区
55	SP055	ピット	B区				

Tab. 1 前津柳ノ内遺跡第1次調査 遺構番号台帳

SK005

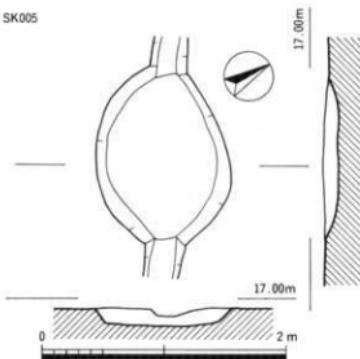


Fig. 6 SK005実測図 (1/40)

ピット

SP055 (Fig. 8、Pla. 6)

SD050東隣で検出したピットで円形を呈する。検出長軸約0.7m、短軸約0.59m、最大深さ約0.14mを測る。埋土は淡黒灰色粘質土の単層である。若干ピット東端が抉れた形状を呈する。遺物は弥生土器甕片、サヌカイト剥片を出土しているが、小片のため図示していない。

ピット

SP060 (Fig. 8、Pla. 6)

SP055北隣で検出した柱穴と考えられる遺構である。テラスを設け、柱穴と考えられるピットを検出している。検出長軸約1.22m、短軸約0.92m、テラス部分深さ約0.15m、柱穴深さ約0.63mを測る。土層から柱痕は確認していない。遺物は弥生土器甕片を出土しているが、小片のため図示していない。

ピット

SP065 (Fig. 8)

SP055南隣で検出したピットで、SD050を切る遺構である。ほぼ円形を呈し、検出長軸約0.78m、短軸約0.74m、最大深さ約0.42mを測る。出土遺物は弥生土器片を出土しているが、小片のため図示していない。

SD050

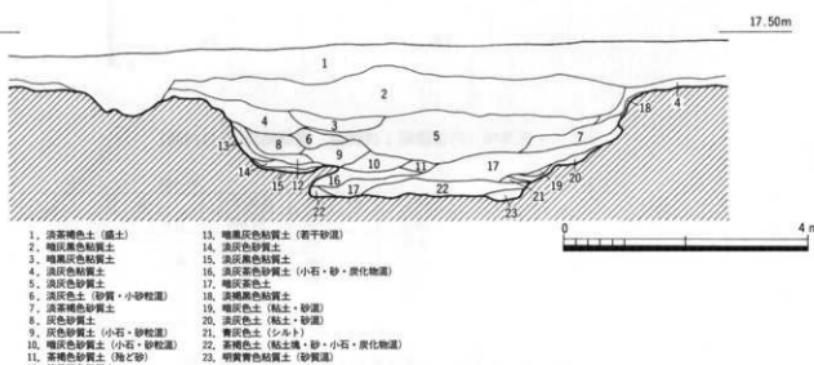


Fig. 7 SD050実測図 土層図 (1/80)

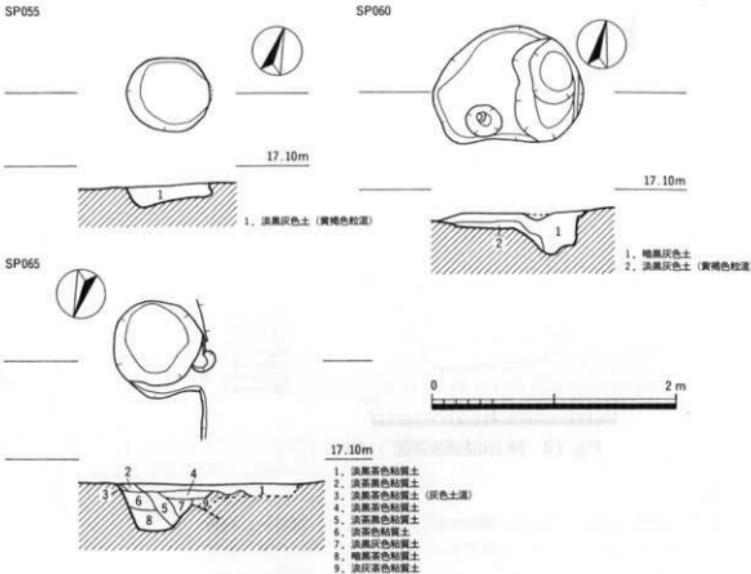


Fig. 8 SP055, 060, 065遺構実測図 (1/40)

C区

B区の西側に設定している。層位がA、B区とは若干様相が異なり、現況から約80cm程度の圃場整備時の盛り土下に淡灰黒色土、淡黒灰色土の包含層を検出し、更に下層に淡灰色土、一部に淡灰白色粘質土を検出している。地山は明茶褐色土であり、これに切り込む形で遺構を検出している。遺物は遺構の他に淡灰色土、淡灰白色粘質土から石鉢等を出土している。また、ピットを多く検出しているが、これらは木の根等の痕跡が殆どである。

溝

SD100 (Fig. 10, Pla. 7)

若干弧を描くように南北に走る溝である。検出長約6.9m、幅約1.09m、最大深さ約0.36mを測る。南側で旧水路（現代水路）に切られている。溝断面は緩やかなU字状を呈する。遺物は弥生土器甕片を出土している。

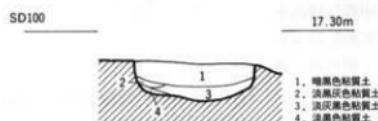


Fig. 10 SD100土層図 (1/40)

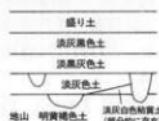


Fig. 9 C区土層模式図



Fig. 11 D区土層模式図

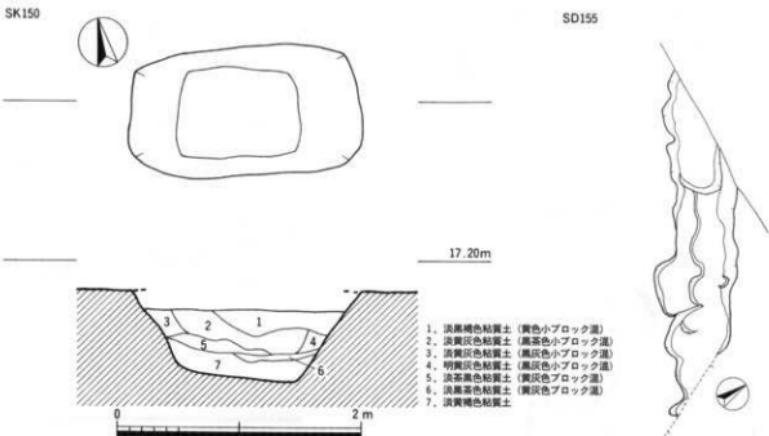


Fig. 12 SK150遺構実測図 (1/40)

D区

C区の西側に設定している。層位がC区とは異なり、現況から約60程度の圃場整備時の盛り土下に暗黒色土、暗灰黑色土の包含層を検出し、更に下層に暗黑灰色土を検出し、これに切り込む形で遺構(SX150)を検出した。暗黑灰色土を除去すると淡灰褐色粘質土、明黄褐色粘質土の包含層を検出し、これに切り込む形で遺構(SD155)を検出した。從って遺構面は最低2面は存在すると考えられる。地山は青灰色粘質土である。また、包含層である淡灰褐色土から石鎚等の遺物を出土している。

土壤

SK150 (Fig. 12, Pla. 8・9)

SD155南西で検出した土壤である。暗灰黑色土に切り込み、平面は隅丸長方形、断面は逆台形を呈する。長軸は N-82°35'47"-W である。埋土には黄・黒色系のブロックが全ての層に含まれる。遺物は須恵器甕片、土師器壺×皿片、瓦質土器片を出土している。

溝

SD155 (Fig. 13, Pla. 9)

調査区東側で明黄褐色土に切り込む遺構である。北西から南東に走る不定形な溝で、溝内部にピット状の痕跡を確認し、溝中程は擾乱を受け残存しない。検出長約11.7m、幅約0.90m、最大深さ約0.13mを測る。埋土は淡灰褐色土の単層である。遺物はサヌカイト製石鎚、黒曜石製石鎚を出土している。

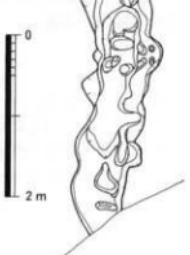


Fig. 13 SD155遺構実測図 (1/60)

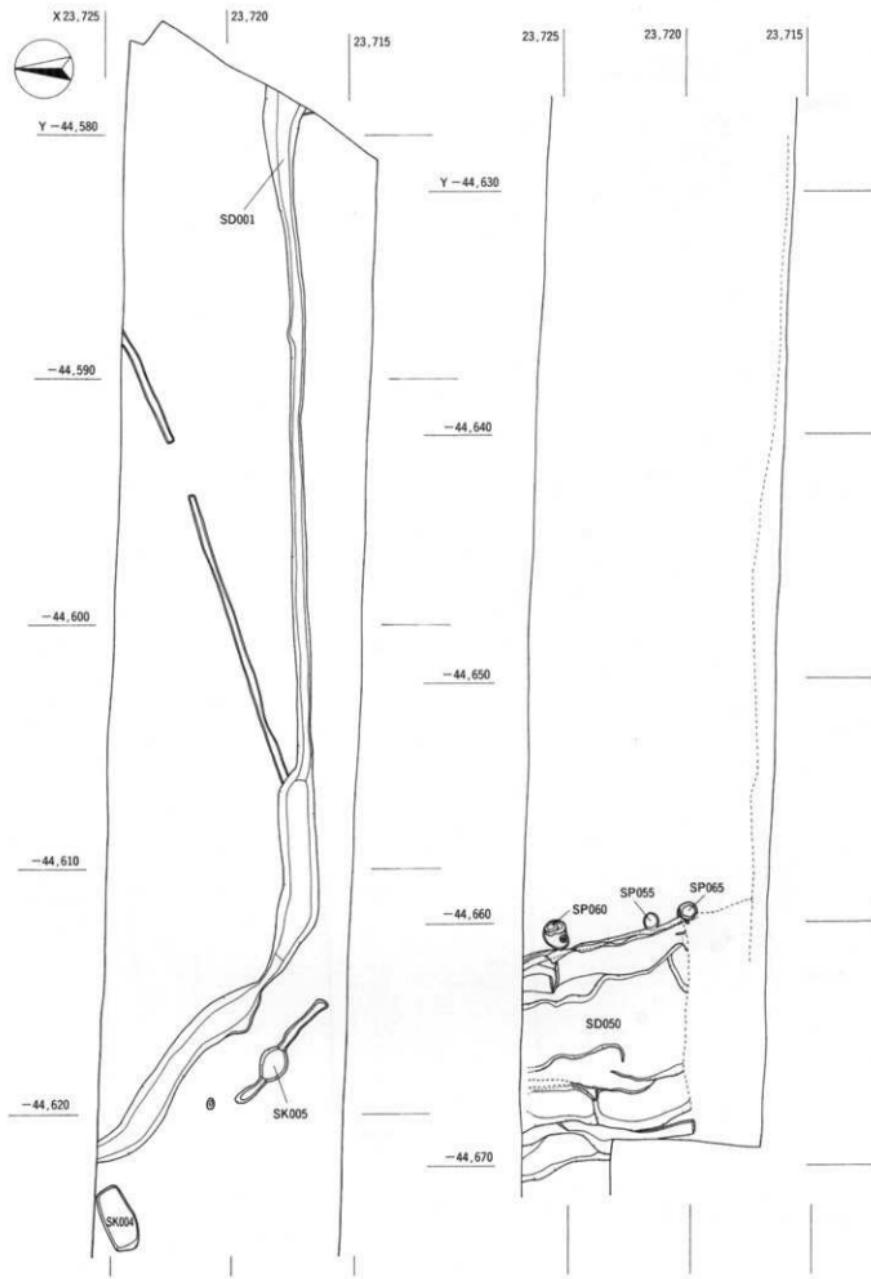


Fig. 14 前津柳ノ内遺跡第1次調査A・B区構造実測図 (1/200)



Fig. 15 前津柳ノ内遺跡第1次調査C・D区遺構実測図 (1/200)

(3) 出土遺物

A区

SD001 (Fig. 16, Pla. 23)

土師器

土鍋 (1) 玉縁状の口縁端部を有する土鍋片である。焼成は良好で外面淡灰茶色、内面は淡橙茶色を呈する。現存器高1.7cmである。

白磁

紅皿 (2) 口径5.9cm、器高1.75cm、底径2.8cmを測る。全面に釉を施し、釉調は淡灰緑色を呈する。全面に貫入が認められる。高台外面に砂目が残る。

青磁

碗 (3) 底部片で高台径5.1cmを測る。釉調は淡灰緑色を呈し、高台部分と体部下端は露胎。内面に細かい貫入が認められる。

染付

碗 (4・5) 4は小碗で、内底中央に五弁花文、外面にも呉須で文様を描く。釉は雜に施され、気泡が認められる。5は碗片で内底は輪状に釉をカキ取り、その上に化粧土を施す。内外面に薄い青色の呉須で文様を描く。

陶器

仮飯具 (6) 底部糸切りで中央に孔を穿つ。釉は坏部内外面に施し、脚部に釉がたれる。坏部内面中央は釉をカキ取る。焼成良好で硬質である。

SK005 (Fig. 16, Pla. 23)

土師器

土鍋 (7) 口径43.8cmを測る。口縁部を玉縁状に仕上げ、体部内面横方向のハケ目、外面は指頭痕が残り、一部縱方向にひび割れを起こしている。外面に煤等の付着は見られない。焼成はやや良好で内外面橙茶色を呈する。

B区

SD050 (Fig. 17, Pla. 23)

弥生土器

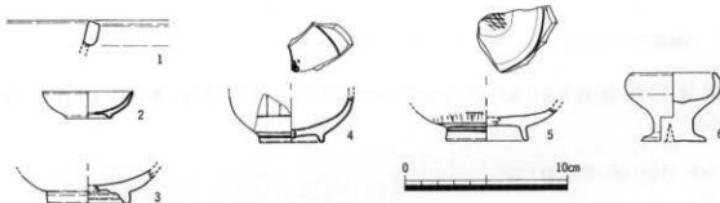


Fig. 16 A区 SD001、SK005 遺物実測図 (1/3)

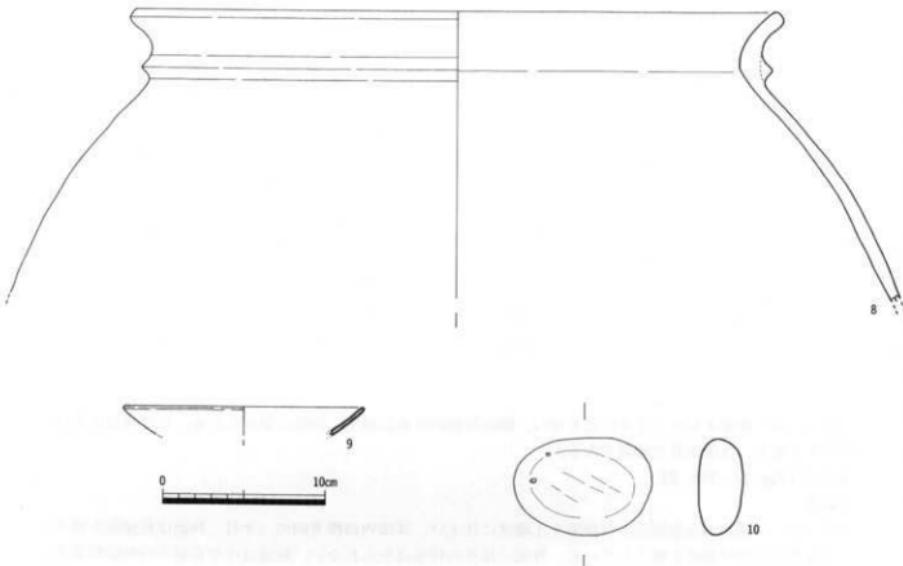


Fig. 17 B区 SD050 遺物実測図 (1/3)

甕（8）弥生後期の甕である。口径42.0cmを測り、頸部屈曲部外面に断面三角形の突帯を貼り付ける。内外面共に磨耗のため調整は不明である。

青磁

皿（9）口縁部片で口径14.9cmを測る。暗灰緑色の釉を薄く施す。

石製品

磨石（10）顕著な使用痕跡を有しないが、全面的に磨かれていると考えられる。重さ235gを測り、安山岩製である。

C区

淡黒灰色土 (Fig. 18, Pla. 23・24)

繩文土器

鉢（11）鉢の口縁部片で外反する器形をとる。胎土に滑石を混入させ、文様は描かれていない。早・前期の無文土器の可能性がある。

石製品

石鎌（12～20）12から17はサヌカイト製の石鎌で12は脚部の抉りが深く、13、14は抉りが緩やかである。15は脚を持たない。16、17は先端部と脚部を欠損する。18から20は黒曜石製の石鎌で先端部と脚部を欠損する。脚部の抉りは深い。

剥片（22・21）21は自然面を残す剥片で、割れ面の風化は著しい。22は使用剥片で割れ面の風化が著しい。

D区

SK150黒黄土 (Fig. 19, Pla. 24)

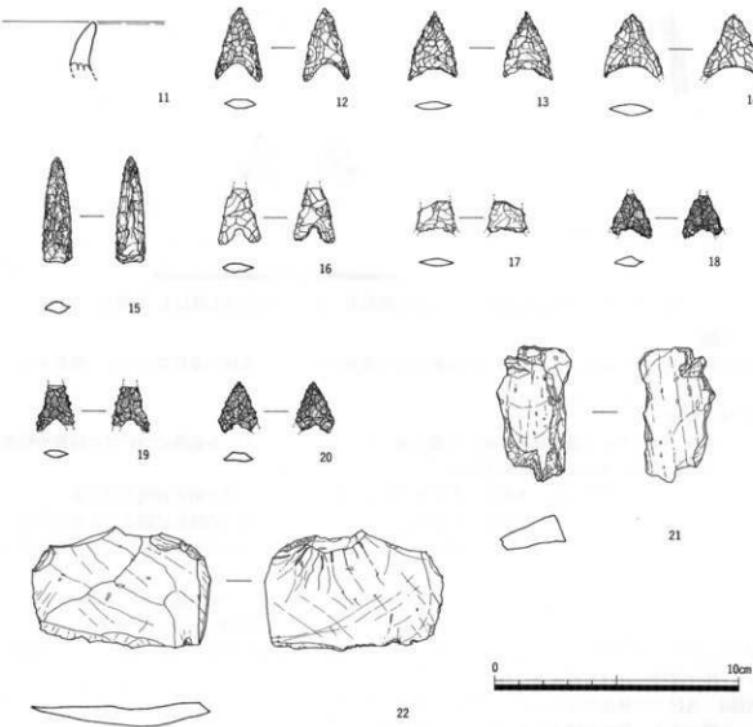


Fig. 18 C区淡黒灰色土 遺物実測図 (1/2、11のみ1/3)

須恵器

甕 (23) 頸部から口縁部にかけての片で内外面ヨコナデ、焼成、還元良好で外面は暗灰色、内面は淡灰色である。

土師器

壺×皿 (24) 口縁部片で調整は磨耗が著しく不明。焼成は不良で淡橙茶色を呈する。

SD155 (Fig. 19, Pla. 24)

石製品

石鎌 (25-27) 25、26はサヌカイト製石鎌で、25は先端が欠損、抉りが緩やかである。26は両脚と先端が欠損する。脚の抉りが深い。27は黒曜石製の石鎌で、脚の抉りは殆どない。

灰黄色土 (Fig. 19, Pla. 24)

石製品

石鎌 (28) サヌカイト製の石鎌で完形である。脚の抉りが深く丸みを持つ。

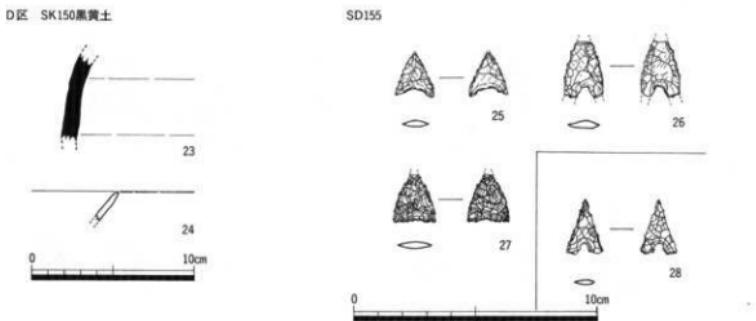


Fig. 19 D区 SK150黒黄土、SD155灰黄色土 遺物実測図（土器1/3、石器1/2）

(4) 小結

各調査区毎の成果を踏まえて前津柳ノ内遺跡第1次調査の全体的な遺構・遺物等について概観する。

1. 遺構・遺物

今回の調査で検出された遺構は溝4条、土壙3基、ピット3個である。各遺構についての時期や特徴について本文と重複する部分もあるが列記する。

SD001 A区での検出である。溝断面はU字状である。出土遺物から埋没期を近世と考える。

SD050 B区での検出である。溝断面はU字状であるが、大溝であるため段状に掘り込まれている。出土遺物の中で青磁片が出土しているが、出土状況から検出面の混入と考えられ、埋没期を弥生時代後期と考える。

SD100 C区での検出である。溝断面はU字状である。切り合状から旧水路である溝に切られており、弥生土器が出土しているが、小片で1点のみであるため埋没期を推定するのは困難である。

SD155 D区での検出である。溝ラインが不定形で断面は緩やかなU字状である。調査区の土層観察や出土遺物から埋没期を縄文時代と考える。

SK004 A区での検出である。出土遺物に土器師を出土しているが、小片で埋没期を推定するのは困難である。他の遺構と比較的新しい遺構と考える。

SK005 A区での検出である。土層と出土遺物から埋没期を近世と考える。

SK150 D区での検出である。隅丸長方形の平面プランを呈する。層位や出土遺物から埋没期を中世と考える。

SP055 B区での検出である。遺構や出土遺物から埋没期を推定するのは困難である。

SP060 B区での検出である。柱穴と考えられるが、建物と想定される他の柱穴は検出されていない。このピットはSD050を切っており、出土遺物が弥生土器のみであるため、埋没時期については弥生時代と考えられる。

SP065 B区での検出である。この遺構もSD050を切っており、出土遺物もSP060と同様で弥生土器のみであるため、埋没時期を弥生時代と考える。

2. 包含層出土の石器について

C区の淡黒灰色土からの包含層から11点の石製品を出土している。この包含層からは縄文土器も出土しており、他の時代に關係する遺物が全く出土していない事から、純粹な縄文時代の包含層と捉えたい。

石製品については出土地点による面としての空間復元はできないが、出土位置における標高は全て近似値をとっており、一連の行為による可能性を示唆できるのではないか。

前津柳ノ内遺跡第2次調査

(1) はじめに

調査地は筑後市大字前津字柳ノ内に所在し、八女市との市境に位置している。調査面積は約6400m²である。調査の都合上、4分割（A区～D区）の調査区設定を行った。調査期間は平成14年4月3日から平成15年1月31日迄である。調査は柴田剛が担当した。

調査区は標高約17m程の低位丘陵端部であり、北側は東西に八女丘陵が延びる。層位模式や遺構・遺物の報告は各地区毎に掲載する。



Fig. 20 調査区地点位置図 (1/3000)

(2) 検出遺構

A区

調査区は入り組んだ市境が形成されている。調査区は市境に沿っており、西側は八女市である。標高は約18m程度である。現況は畑と一部が梨畠である。表土である暗茶土を除去後、淡灰土を検出し、淡灰土に遺構は切り込む。淡灰土下層には黄灰土、黄色シルト、黄色土を検出しているが、遺構面は確認していない。

溝

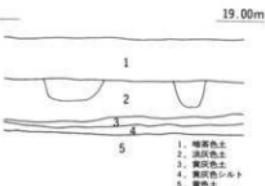
2SD001 (Fig. 22, Pla. 11)

調査区を北西から南東に貫く溝である。検出長約26.8m、検出幅約1.15m～1.5m、深さ約0.57m～0.60mを測る。土層観察から溝は掘り直し又は浚渫が行われていたと考えられる。遺物は弥生土器壺片を1点出土したのみである。

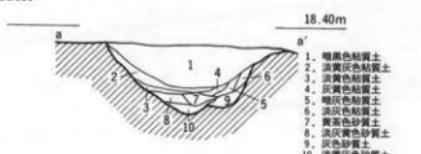
2SD010 (Fig. 22, Pla. 11)

調査区西側で検出した溝で、遺構両端が搅乱により殆ど残存していない。北西端では北へ折れ曲がる。残存検出長約11.2m、検出幅約0.86m～1.54m、深さ約0.53mを測る。埋土は黒色系である。遺物は土師小皿、甕、白磁紅皿、染付碗、陶器甕、瓶、棒状土製品を出土している。

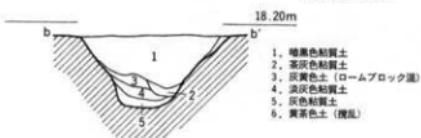
Fig. 21 A区土層模式図



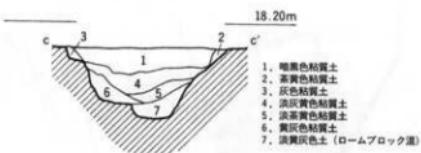
2SD001



1. 墓原色粘質土
2. 淡灰黃灰土粘質土
3. 淡灰黃灰土
4. 淡灰黃色粘質土
5. 淡灰黃色粘質土
6. 淡灰黃色粘質土
7. 淡灰黃色粘質土
8. 淡灰黃色砂質土
9. 淡色砂質土
10. 淡灰黃色砂質土

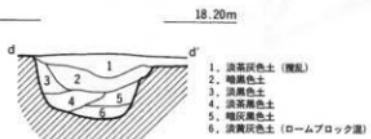


1. 墓原色粘質土
2. 黒灰色粘質土
3. 黄灰色粘質土 (ロームブロック道)
4. 淡灰黃色粘質土
5. 淡色粘質土
6. 黄灰色粘質土

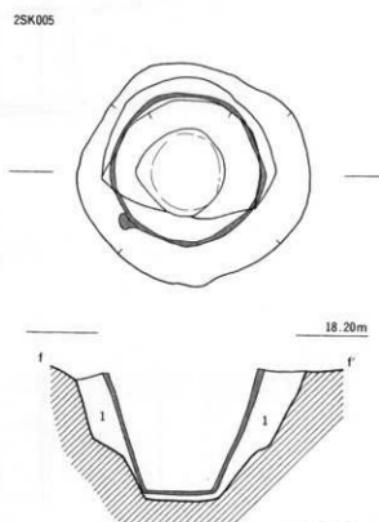


1. 墓原色粘質土
2. 黄灰色粘質土
3. 黄色粘質土
4. 淡灰黃色粘質土
5. 淡灰黃色粘質土
6. 黄灰色粘質土
7. 淡灰黃色土 (ロームブロック道)

2SD010



1. 淡灰黃色土 (擾乱)
2. 墓原色土
3. 黑灰色土
4. 淡茶褐色土
5. 墓原色土
6. 淡灰黃色土 (ロームブロック道)



1. 黄灰色粘質土



Fig. 22 2SD001, 010 (1/40), 2SK005 (1/20) 実測図

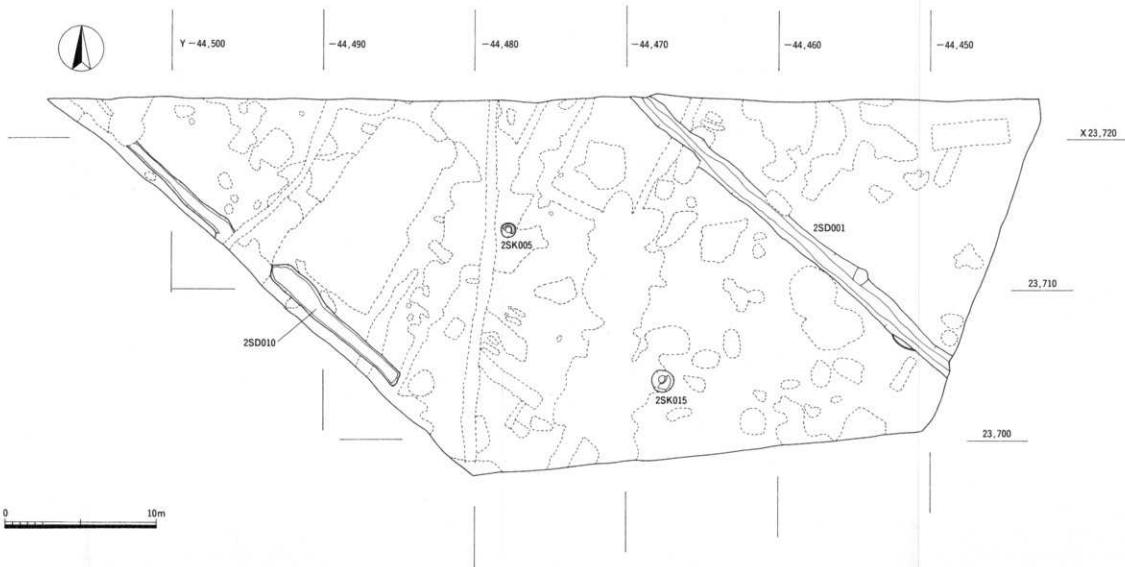


Fig. 23 前津柳ノ内遺跡第2次調査A区遺構実測図 (1/300)

土壙

2SK005 (Fig. 22, Pla. 12)

調査区中央西寄りで検出した円形の土壙で、土師器大甕を埋め込む遺構である。掘り方は段掘りしてテラスを設け甕を埋め込む。甕上端は削平により殆ど残存していない。掘り方幅約0.96m、テラス深さ約0.3m、深さ約0.54mを測る。掘り方埋土は黄灰色粘質土である。甕内に遺物等は確認していない。

2SK015 (Fig. 24, Pla. 12)

調査区中央南で検出した円形の土壙で、2SK005と同様の土師器大甕を埋め込む遺構である。掘り方は東側を段掘りし、テラスを設けた構造である。掘り方幅約1.43m、テラス深さ約0.37~0.46m、深さ約0.6mを測る。甕上端は削平により残存していない。掘り方埋土は淡灰黄色土である。甕内及び掘り方から染付皿、白磁皿、陶器擂鉢、甕、鉢を出土している。

2SK015

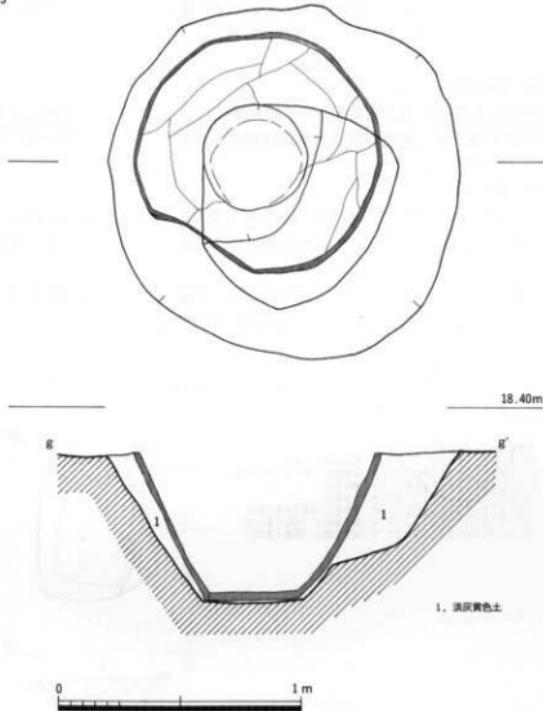


Fig. 24 2SK015 実測図 (1/20)

B区

A調査区の東隣りに位置する。現況は道路予定地による土地買取後の更地である。標高は約18~19m程度である。表土である畠土を約0.6m程確認し、その下層である茶色土に遺構は切り込む。更に下層に9層の土層を確認しているが、遺構や遺物は含まれていない。

遺構は溝、土壤を検出している。また、整地と考えられる面や近代以降の掘り込み等多数検出されており、遺物も多く出土している。

溝

2SD035 (Fig. 26, Pla. 13)

調査区南西端で検出した溝である。A区で検出したSD001の延長部分と考えられ、同一の溝である。検出幅約0.97m、深さ約0.41mを測る。溝断面は掘り直し又は浚渫と考えられる形状を呈する。遺物は出土していない。

土壤

2SK025 (Fig. 26, Pla. 13)

調査区中央で検出した略方形の土壤である。検出長軸約1.17m、短軸約0.93m、深さ約0.60mを測る。南壁が若干テラス状を呈する。壙底に杭等の痕跡は確認していない。長軸の振れはN-49°32'15"-Wである。遺物は出土していない。

2SK030 (Fig. 26, Pla. 14)

調査区中央南端で検出した楕円形の土壤である。検出長軸約1.2m、短軸約0.88m、深さ約0.67mを測る。壙底に杭等の痕跡は確認していない。長軸の振れはN-76°16'39"-Wである。遺物は出土していない。

2SK040 (Fig. 28)

2SK025北東で検出した土壤である。検出長軸約1.03m、短軸約0.89m、深さ約0.57mを測る。壙底は西が若干高くなる。長軸の振れはN-60°25'19"-W 遺物は出土していない。

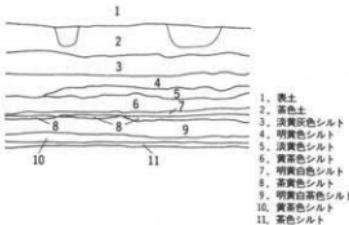


Fig. 25 B区土層模式図

2SD035

2SK025

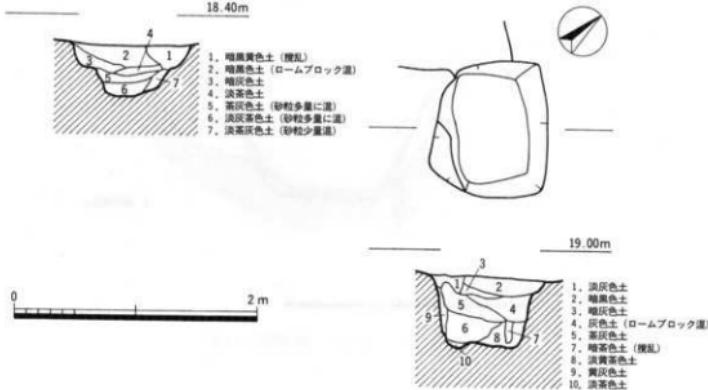


Fig. 26 2SD035, 2SK025 実測図 (1/40)

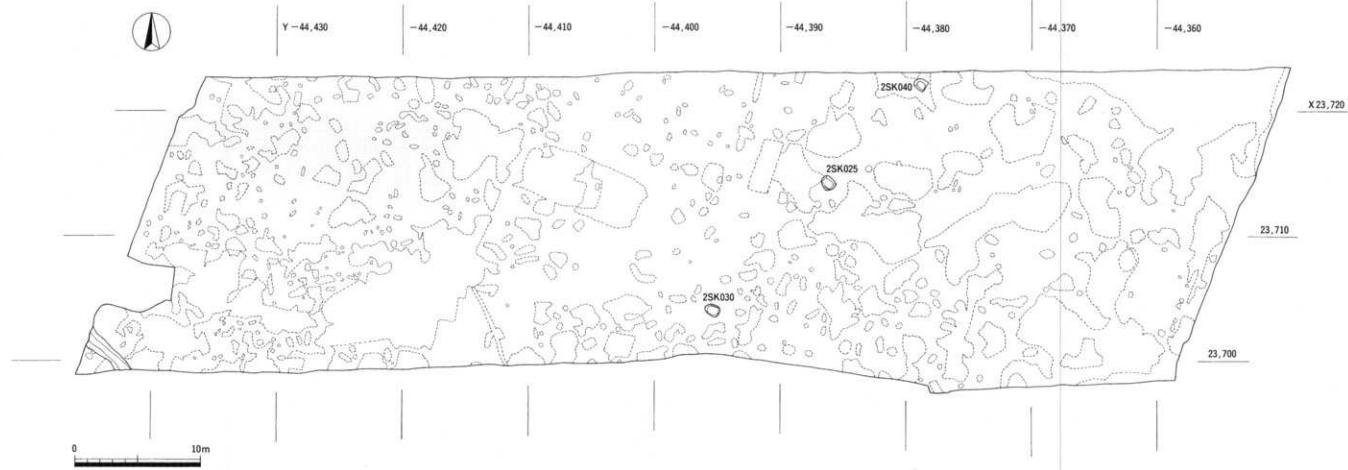
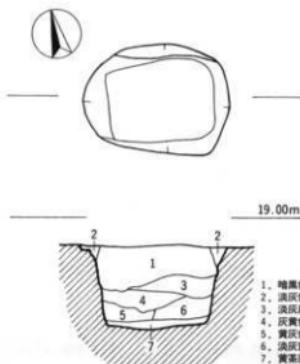


Fig. 27 前津柳ノ内遺跡第2次調査B区遺構実測図 (1/300)

2SK030



2SK040

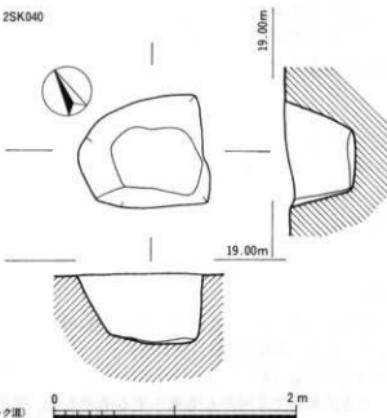


Fig. 28 2SK030、040 実測図 (1/40)

C区

当調査区は前津柳ノ内遺跡第1次調査の南側に展開する。既存の道路部分である。標高は約18m程度であり、1次調査区から連続する遺構も検出している。遺構面は道路のアスファルト除去後の表土を40cm~50cm掘り下げたところで、明黄色粘質土の地山に遺構は切り込んでいる。

溝

2SD045 (Fig. 29)

調査区の西側を東北から南西に走る溝である。検出長約8.3m、幅約0.34m~0.73m、深さ約0.14mを測り、断面は逆台形を呈する。遺物は出土していない。

2SD050 (Fig. 29)

2SD045の北側を東西に若干蛇行しながら走る溝である。検出長約46.4m、幅約0.3m、深さ約0.21mを測る。溝断面はU字状を呈する。遺物は弥生土器甕片、土師器甕片、青磁片、磨石を出土している。

2SD055 (Fig. 29)

調査区中央を東西に走る溝である。検出長約23.5m、幅約0.47m、深さ約0.12mを測り、溝断面は逆台形を呈する。遺物は出土していない。

2SD065 (Fig. 29)

調査区東側で北西から南東へ走る溝である。検出長約7.7m、幅約1.05m~1.85m、深さ約0.43mを測り、溝断面は緩やかなV字状を呈する。溝土層観察から掘り直し（浚渫）が行われたと考えられる。遺物は土師器片を出土しているが小片で図示していない。

2SD075

1次調査の1SD050の延長部を検出しているが、雨水流入で崩壊及び危険防止のため検出掘削後、すぐに埋め戻している。このため、遺構南側の調査区であるD区で土層観察等を報告する。

2SD080 (Fig. 31, Pla. 16)

調査区東端で北西から南東に走る溝で検出長約10.5m、幅約2.45m、深さ約0.54mを測り、溝断面は緩やかなU字状を呈する。遺物は弥生土器甕片、須恵器甕片、土師器环片、甕片、鉢片、碗片、手すくね片、砥石を出土している。

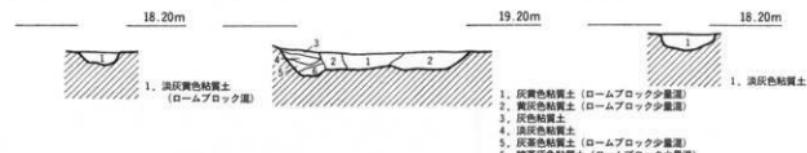
2SK070 (Fig. 31, Pla. 17)

2SD075の西側で検出した不定形な土壤で、検出長軸約1.55m、短軸約0.79m、深さ約0.14mを測る。遺物は染付片を出土している。

2SD045

2SD050, 055

2SD055



2SD065, 055

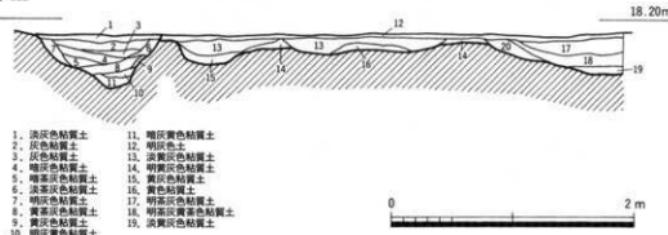


Fig. 29 2SD045, 050, 055, 065 実測図 (1/40)

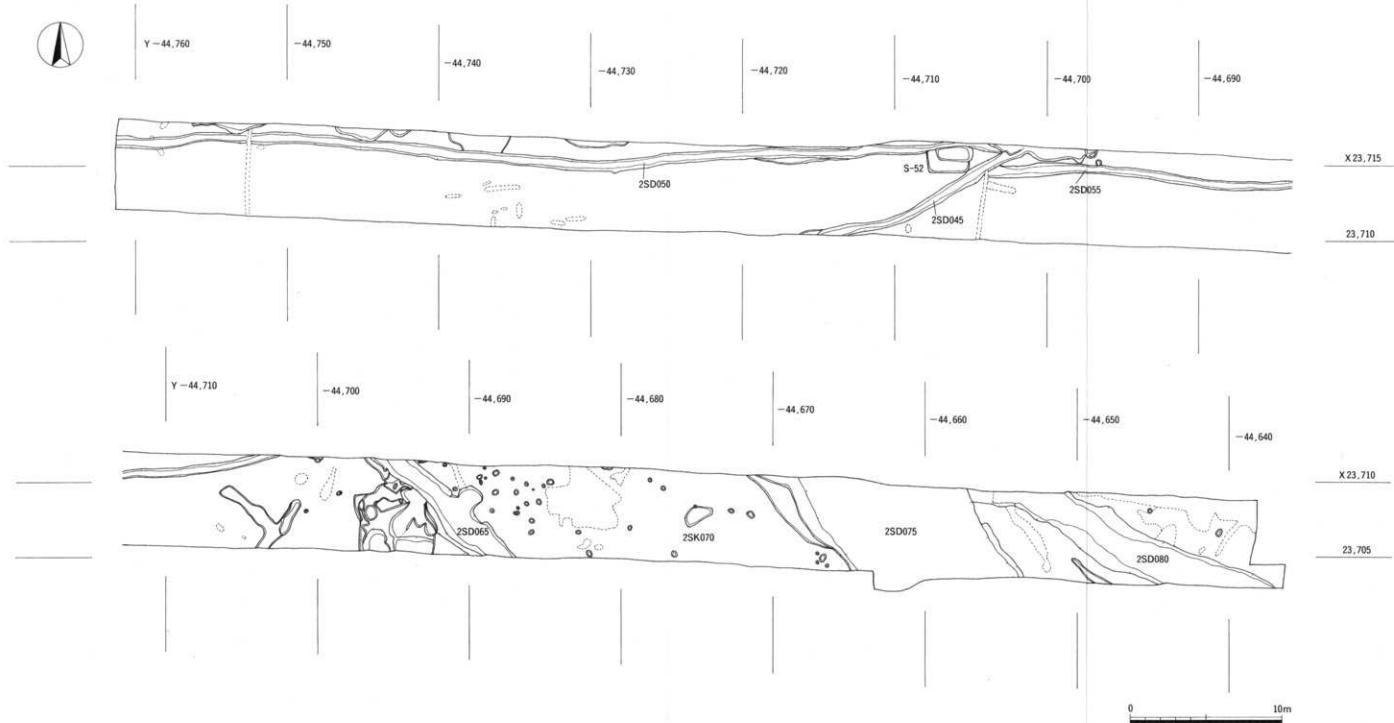
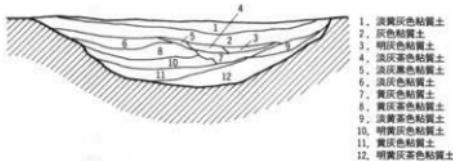


Fig. 30 前津柳ノ内遺跡第2次調査C区遺構実測図 (1/250)

2SD080

18.40m



2SK070



18.40m



Fig. 31 2SD080、2SK070 実測図 (1/40)

D区

当調査区はC調査区の南隣りに位置する。現況は梨畠と田である。遺構面の状況は1次調査、2次C区と同様で明黄色粘質土の地山に遺構は切り込んでいる。また、遺構を確認していない部分については順次埋め戻している。

溝

2SD069 (Fig. 33)

調査区東側で検出した北西から南東へ走る溝で、検出長約9m、幅約0.48m、深さ約0.15mを測る。溝断面は逆台形を呈する。埋土は淡灰色粘質土と暗灰色粘質土で構成される。遺物は出土していない。

2SD074 (Fig. 33)

調査区東端で検出した北西から南東へ走る溝で、検出長約9.4m、幅約0.97m、深さ約0.24mを測る。溝断面は緩やかなU字状を呈する。埋土は淡灰色粘質土と暗灰色粘質土で構成される。遺物は須恵器甕、土師器壺、白磁碗を出土している。

2SD090 (Fig. 33, Pla. 20)

調査区西側で検出した北東から南西へ走る溝で、C区のSD045の延長部分と考えられる。検出長約14.2m、幅約0.55m、深さ約0.99mを測る。溝断面は緩やかなU字状を呈する。埋土は灰色粘質土と淡灰黄色粘質土で構成される。遺物は土師器片を出土しているが小片のため図示していない。

2SD100 (Fig. 33, Pla. 20・21)

調査区中央で検出した溝で1次調査の1SD050、2次C区2SD075の延長部分になる。検出長約5.4m、幅約7.8m～9m、深さ約2.23mを測る。溝断面はU字状を呈するが、溝両下端は若干テラス状を呈している。遺物は出土していない。

2SD110 (Fig. 33)

調査区中央東寄りで検出した溝で2SD100を切る。溝は蛇行しており、C区の2SD065の延長部分と考えられる。調査所見では溝は掘り直し（浚渫）を幾度か行っていると判断している。検出長約31.4m、幅約0.9～1.95m、深さ約0.53mを測り、溝断面は緩やかなU字状を呈する。遺物は弥生土器甕片、高环片、須恵器蓋・高环片、土師器環片、碗片、黒曜石剥片を出土している。

2SD120 (Fig. 33, Pla. 21)

調査区東側で北西から南東へ走る溝である。C区2SD080の延長部分になるとを考えられる。検出長約27m、幅約1.1m～1.8m、深さ約0.64mを測る。溝断面はU字状を呈する。遺物は弥生土器甕片、須恵器甕片、土師器壺片、碗片、瓦器碗片、白磁片、陶器片、サヌカイト製石鎌、黒曜石剥片を出土している。

土壤

2SK063 (Fig. 33, Pla. 22)

調査区中央で検出した不定形な土壤である。検出短軸約1.88m、深さ約0.08mを測る。遺物は出土していない。

2SK064 (Fig. 33, Pla. 22)

2SK063の東隣りで検出した土壤で椭円形を呈する。検出長軸約1.4m、短軸約1.0m、深さ約0.06mを測る。遺物は出土していない。

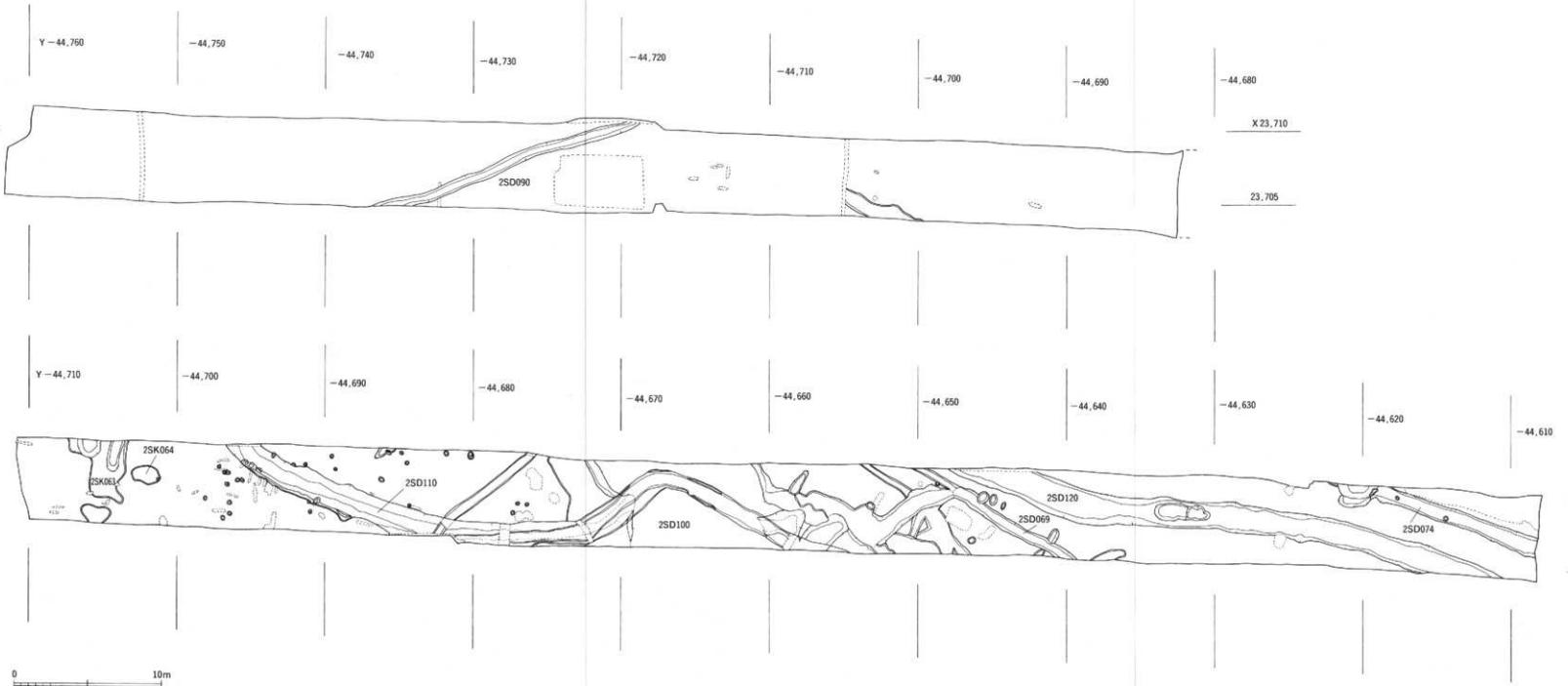


Fig. 32 前津柳ノ内遺跡第2次調査D区遺構実測図 (1/250)

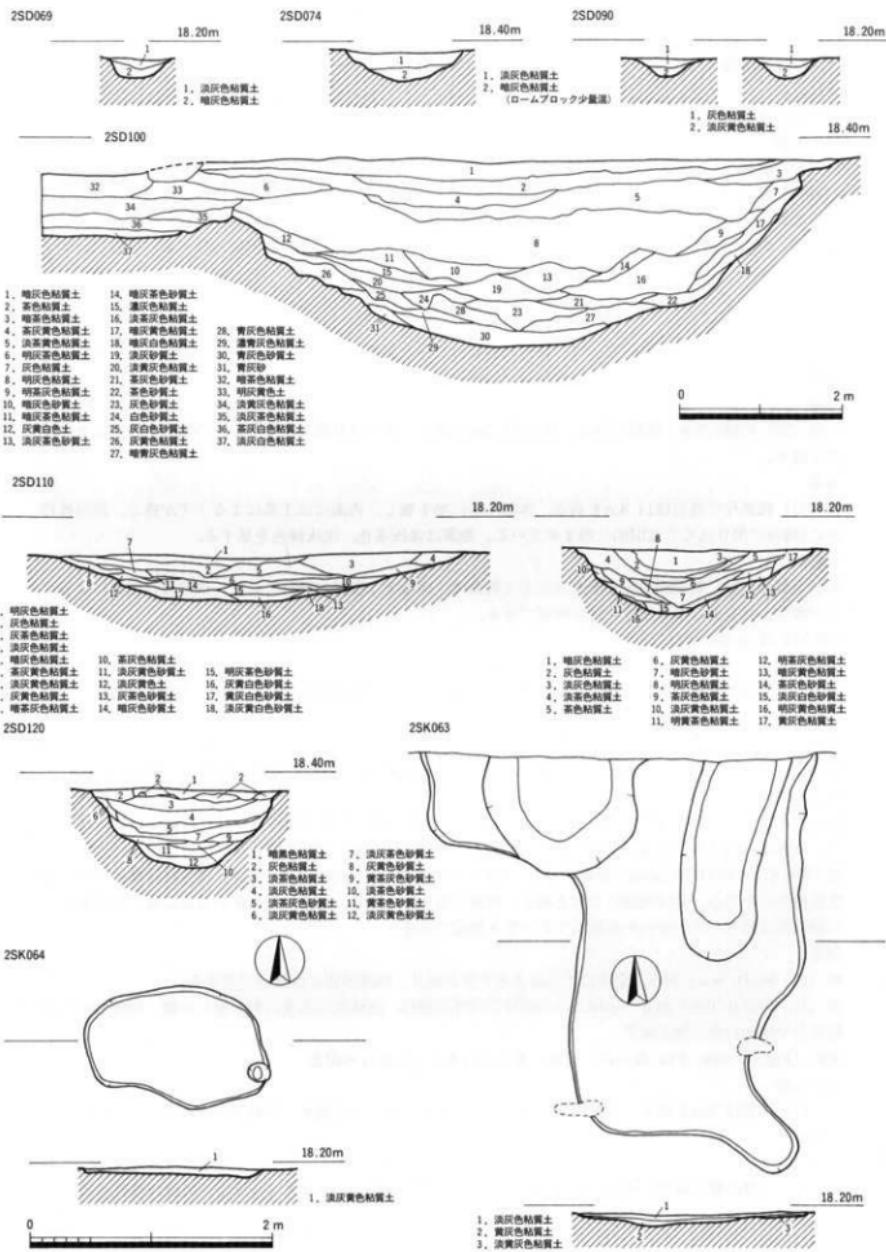


Fig. 33 D区土層・遺構実測図 (1/40、2SD100は1/60)

(3) 出土遺物

A区

2SD001 (Fig. 34、Pla. 24)

弥生土器

壺 (29) 体部片で、断面台形の突帯が張り付く。突帯下に斜方向にハケ目が施される。

2SK005 (Fig. 34)

土師器

甕 (30) 大型の甕で底径31.5cm、残存器高54.3cmを測る。底部内面に付着物が認められる。内外面はナデと工具痕が残る。焼成はやや良好である。

2SD010 (Fig. 34・35、Pla. 24・25)

土師器

小皿 (31) 小皿片で底部回転糸切り、体部内外面はヨコナデ調整である。焼成はやや不良、淡灰茶色を呈する。

白磁

紅皿 (32) 口径5.3cm、器高1.55cm、高台径1.5cmを測る。外面は貝殻状の型押し、内面と口唇部にかけて釉を施す。

陶器

甕 (33) 底部片で高台径14.8cmを測る。体部外面に釉を施し、内面には工具によるナデが残る。高台接地面に3箇所に削り込んで意図的に凹ませている。釉調は淡灰茶色、淡灰緑色を呈する。

土製品

棒状土製品 (34) 断面四角形を想定させる土製品で、両端と1面は欠損している。成形後の工具によるナデが残り、残存面は全て被熱痕跡を確認できる。

2SK015 (Fig. 35、Pla. 25)

土師器

甕 (35) 2SK005出土の甕と同様のものである。底径38.8cm、残存器高42.2cmを測る。内底に付着物が認められる。内外面はナデと工具痕が残る。

白磁

皿 (36) 口径6.6cm、器高2.5cm、高台径2.5cmを測る。高台接地部以外を施釉。釉は淡灰白色を呈する。

染付

碗 (37~39) 37は湯飲み碗である。口径6.5cmを測る。外面に蝶の文様を描く。38は内外面に格子文様を描く。体部は内湾するが口縁部でやや開き気味に立つ。39は内外面に文様を描く。

皿 (40~41) 40は口径9.55cm、器高2.55cm、底径4.1cmを測る。内面に文様を描き、高台接地部と内底を輪状に釉をカキ取る。41は内面に文様を描き、内底の釉をカキ取り、底部外面は蛇の目状に釉をカキ取る。口縁端部は残存していないが玉縁状であったと想定できる。

陶器

鉢 (42) 底径6.9cmを測る。全面に工具によるナデが残り、体部外面には煤が付着する。

甕 (43) 口径40.0cmを測る。口縁のみの破片で内外面施釉。全体的に茶系の釉を施した後、頸部外面に淡緑茶色や淡緑白色の釉を施す。

攪乱 (Fig. 35~39、Pla. 25~27) 攪乱と考えられるピットからの出土

弥生土器

甕 (44) 口径18.5cmを測る。内面頸部屈曲部下に斜方向のケズリを施す。口縁部内外面はナデ。焼成はやや良好。

土師器

甕 (45) 大型の甕口縁部と考えられ、端部を肥厚させる。内面と口唇部をヨコナデ、外面は磨耗が著しいため不明。

鉢（46～53）46は体部から口縁部にかけて内湾させて端部を丸く仕上げた鉢で口径23.25cmを測る。口縁内面に横方向のミガキを施す。外面には化粧土と考えられる付着物が残り、内面は工具によるナデを施す。47は口縁部片の鉢で、内面はヨコナデ、外面は斜方向のハケ目を施す。また、外面には2次的と考えられる溝状の痕跡が不定方向に残る。48は口縁部に粘土を鈎状に貼り付け、上から見ると正方形に形作る。口径28.5cm、器高13.9cm、底径19.75cmを測る。外面は横方向のハケ目、内面は指頭痕が残る。49は高台付の鉢で内外面を工具痕が強く残る。口縁部は若干開くと考えられる。50は口径16.2cmを測る。内外面はヨコナデ。51は底径20.0cmを測る。器壁を薄く仕上げ、内面は工具によるナデを施す。体部外面は剥離のため不明。52・53は七輪でセットになると考えられる。52は内面を横方向のハケ目、外面を不定方向のナデで仕上げる。53は内面をハケ目、外面はナデを施す。

鍋（54～55）54は口縁を玉縁状に仕上げる土鍋で外面に指頭痕が残る。内面はヨコナデ。55は外面に煤が多量に付着する鍋で体部を薄く仕上げる。調整はヨコナデ。

瓦質土器

鉢（56）口縁部片で、外面に指頭痕が残る。調整はヨコナデ。

白磁

紅皿（57～58）57は口径8.15cmを測る。外面に型押しで文様を施し、全面に薄く施釉する。58は口径4.9cm、器高1.3cm、高台径1.6cmを測る。外面を貝殻状に型押し、全面に施釉する。57に比べ比較的粗雑なつくりである。

皿×鉢（59）輪花皿若しくは鉢である。全面に薄く施釉し、胎土、釉調共に精良である。

染付

碗（60～64）60は口径10.6cm、器高5.65cm、高台径4.1cmを測る。内外面に文様を描き、全面施釉である。61は底部片（皿）で底径9.7cmを測る。底部外面を蛇の目状に釉をカキ取る。内外面に文様を描く。62は高台径4.1cmを測る。全面施釉であるが、高台接地面は削られている。63は口縁部が若干反る碗で口径11.7cmを測る。64は口縁端部を玉縁状に仕上げる碗で口径12.8cmを測る。内面に文様を描く。

皿（65～67）65は口径18.7cm、器高4.05cm、高台径10.0cmを測り、内外面に文様を描く。66は口径8.3cm、器高2.1cm、高台径3.8cmを測る。内底に現在2カ所の針支え痕跡を残す。67は口径8.15cm、高台径2.3cm、高台径4.55cmを測る完形品である。3カ所に針支え痕が残る。

陶器

蓋（68～70）68は口径6.8cm、器高1.6cmを測る。ツマミと内面に暗灰褐色の鉄釉を施す。69は口径8.7cm、かえり径6.2cm、器高2.0cmを測る。天井部に施釉し、ツマミが付いていたと考えられる。70はツマミが破損しており、口径6.2cm、底径1.8cm、器高3.0cmを測る。底部切り離しは回転糸切り。

碗（71）口径10.6cm、残存器高3.6cmを測る。釉調は明緑茶色を呈し、内底に針支え痕が残る。

壺（72）高台径8.8cmを測る。全面に淡茶灰色の釉を施す。

擂鉢（73～75）73は口縁内外面に暗茶褐色の釉を施し、内面に擦り目を入れる。74は10本程度の単位で擦り目を施し、外面は工具によるナデが残る。75は口径17.85cm、器高5.55cm、底径9.8cmを測る。口縁端部を若干折り曲げ、内面は黒褐色、外面は赤茶色を呈する。

片口鉢（76）口径23.2cm、器高9.5cm、高台径10.0cmを測る。内底に残存で4カ所に針支え痕が残る。

瓦類

平瓦（77）素焼きの平瓦で、側面は切り込み痕と割れの痕跡が残る。調整はナデ、淡橙茶色を呈する。

丸瓦（78）素焼きの丸瓦で、側面は面取りしている。調整は磨耗が著しく不明。淡赤黄色を呈する。

石製品

砥石（79～81）全て砂岩製で79は2面、80は4面、81は残存で1面の使用が見られる。

石鎌（82）黒曜石製の石鎌で脚の抉りが浅く薄い。

土製品

棒状土製品（84～85）84は破損が著しいが、胎土は比較的精選されており、残存面に2次的な被熱痕跡が見られる。85は断面四角形であり、2面に被熱痕が残り、その上に津のような付着物が残る。

C区

2SD045 (Fig. 40, Pla. 27)

石製品

石鎌 (86) サスカイト製の石鎌で脚部が欠損している。0.7cmを測る。

2SD075 (Fig. 40, Pla. 28)

白磁

碗 (87) 口縁部を玉縁状に仕上げる。外面下部は露胎。

皿 (88~89) 88は高台径4.0cmを測る。見込み部分を蛇の目状に釉をカキ取る。外面は露胎。89は底径6.7cmを測る。内外面共に釉を施す。

陶器

鉢 (90) 口縁部を折り曲げ玉縁状に仕上げる。全面に暗赤茶色の釉を施す。

土製品

土鍤 (91~92) 共に1.5cm程度の孔を貫通させ、91はほぼ完形。

2SD080 (Fig. 40・41, Pla. 28)

劣生土器

壺 (93) 小型の壺で口径8.3cmを測る。磨耗が著しいため調整は不明であるが、体部外面に黒斑が残る。

甕 (94) 口縁部片で端部を若干摘み開く。調整は磨耗が著しいため不明。

土師器

壺 (95) 底径11.4cmを測る。調整は磨耗が著しいため不明。

碗 (97) 体部片で若干内湾しながら立つ。磨耗が著しいため調整は不明。

瓦器

椀 (96) 高台径8.1cmを測る。外面はヨコナデ、内面は磨耗が著しいため不明。

須恵器

甕 (98) 脚部片で外面は格子状のタタキ目、内面は同心円状の当て具痕が残る。還元良好で淡灰茶色。

石製品

砥石 (99) 安山岩製の砥石で全面に使用が見られる。

攪乱

土師器

小皿 (100) 底部回転糸切りの小皿で、口径9.4cm、器高1.14cm、底径8.0cmを測る。

壺 (101) 底部回転糸切りの壺で、口径11.3cm、器高1.75cm、底径8.6cmを測る。

青磁

碗 (102) 龍泉窯系の碗で高台径6.4cmを測る。

白磁

碗 (103~105) 103は小碗で高台径3.3cmを測る。内外面に貫入が入る。104は口唇部に面取りを施す碗。105は口縁を玉縁状に仕上げる碗である。

染付

瓶 (106) 高台径8.0cmを測る。外面に文様を施し、内面は露胎。高台接地面に砂目跡が残る。

D区

2SD085 (Fig. 42)

石製品

磨石 (107) 安山岩製の磨石で中央部がやや凹む。

2SD120 (Fig. 42, Pla. 28)

須恵器

鉢 (108) 底径8.15cmを測り、底部回転糸切りである。外面はヨコナデ、内面はヨコナデ後、不定方向のナデを施す。

瓦器

椀（109）口径16.85cm、器高5.4cm、高台径6.2cmを測る。焼成不良で暗黒灰色を呈し、調整は不明。
白磁

碗（110）高台径6.1cmを測る。内面の釉はやや厚く、外面は露胎。

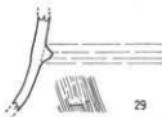
石製品

石鎌（111）サヌカイト製の石鎌で、片方の脚が欠損する。

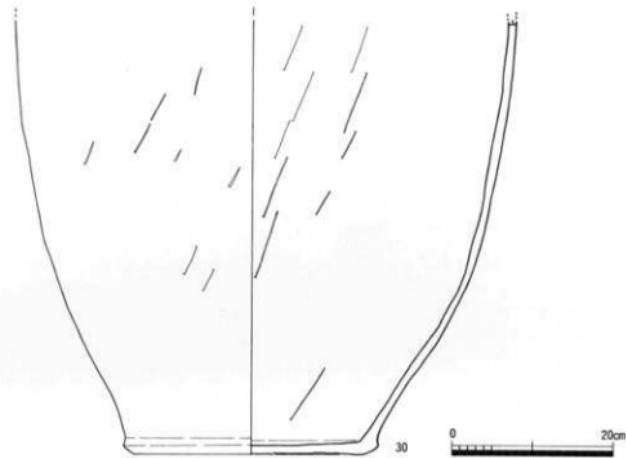
土製品

土鍤（112）両端は欠損し最大幅0.8cm、直径0.4cmの孔を貫通させる。

A区 2SD001



A区 2SK005



A区 2SD010

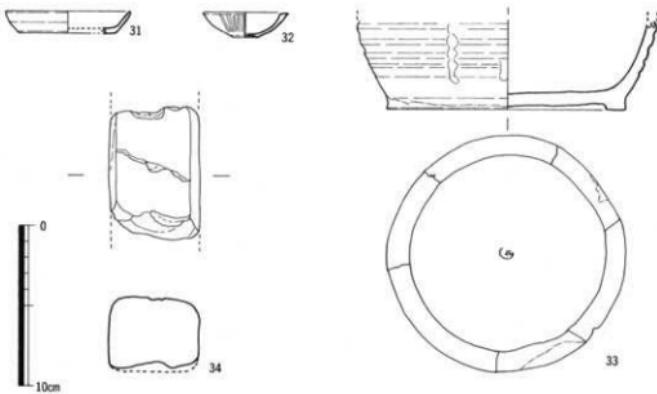
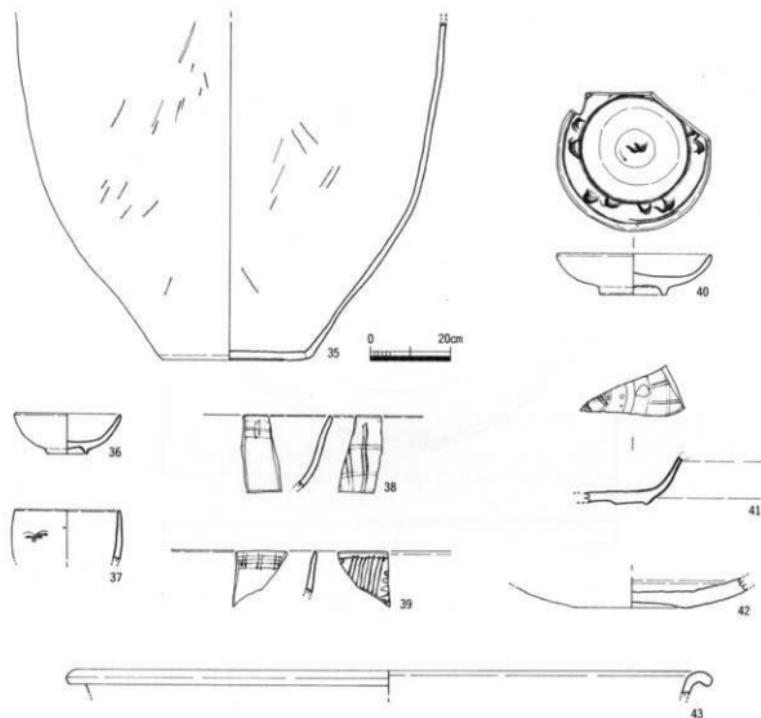


Fig. 34 A区遺物実測図 (1/3、30の斐1/4)

2SK015



擾乱

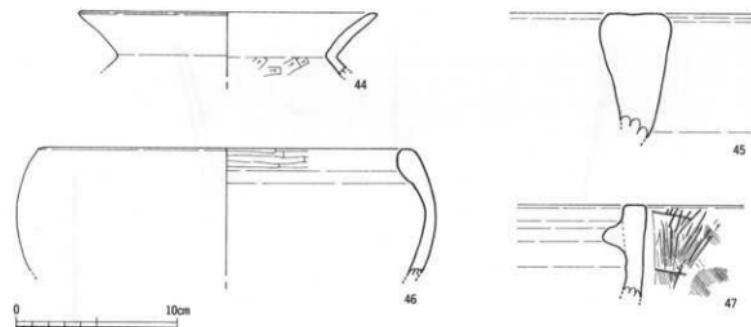


Fig. 35 A区遺物実測図 (1/3)

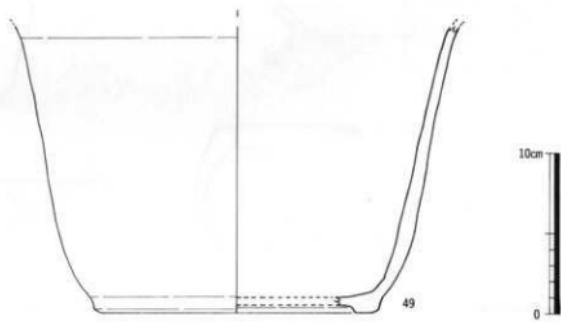
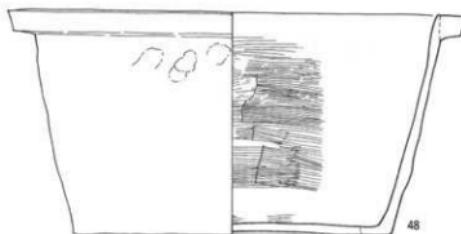
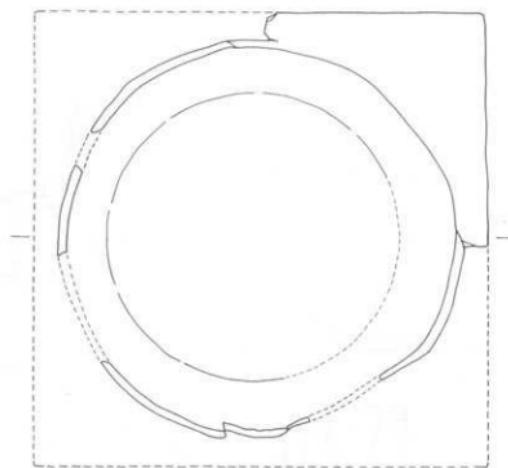


Fig. 36 A区遺物実測図 (1/3)

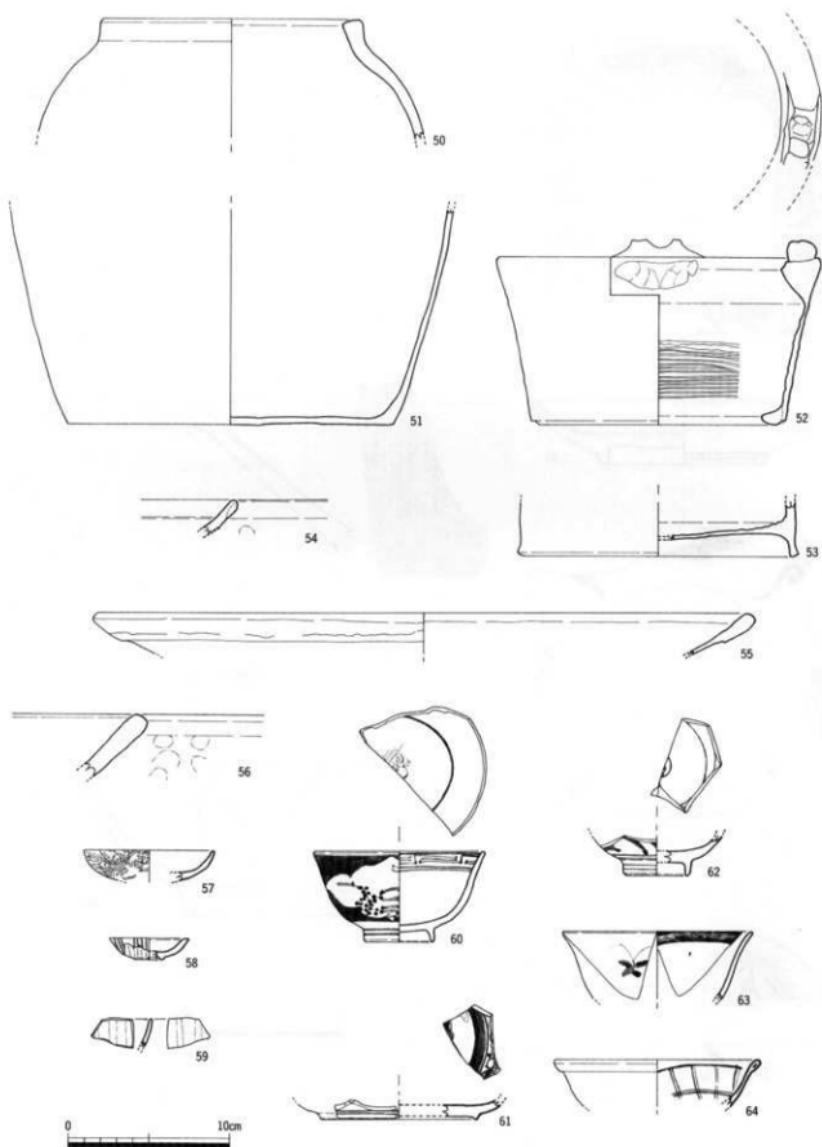


Fig. 37 A区遺物実測図 (1/3)

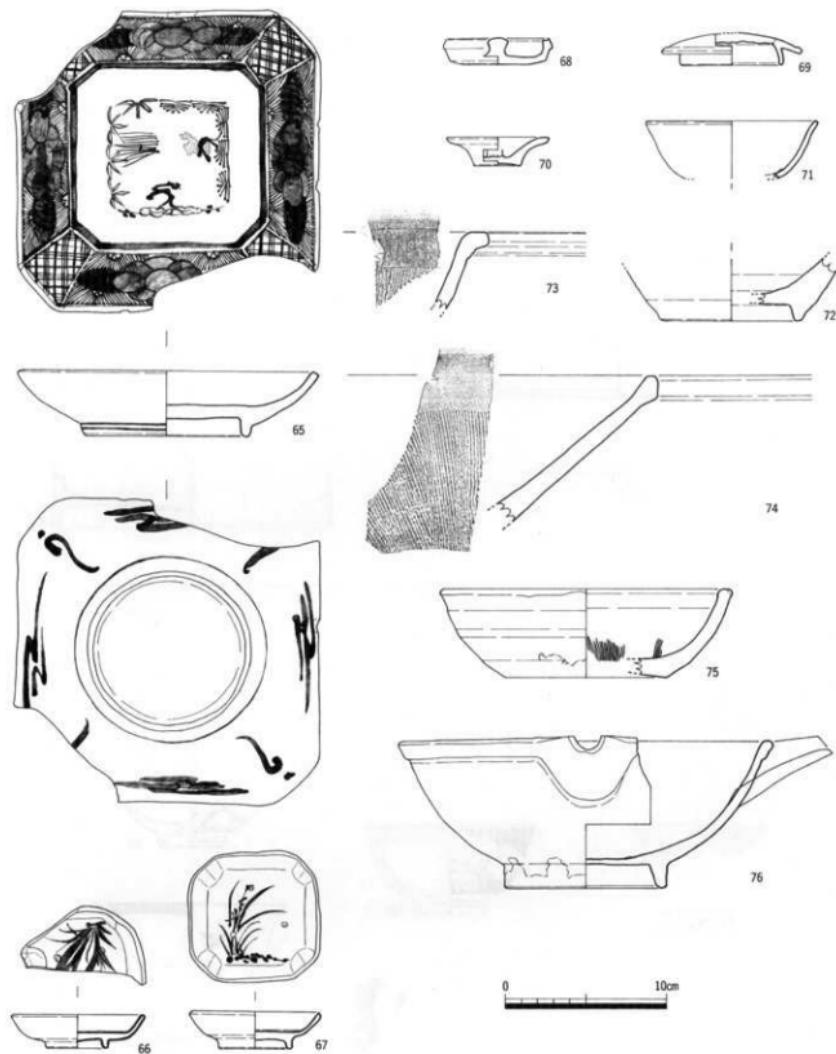


Fig. 38 A区遺物実測図 (1/3)

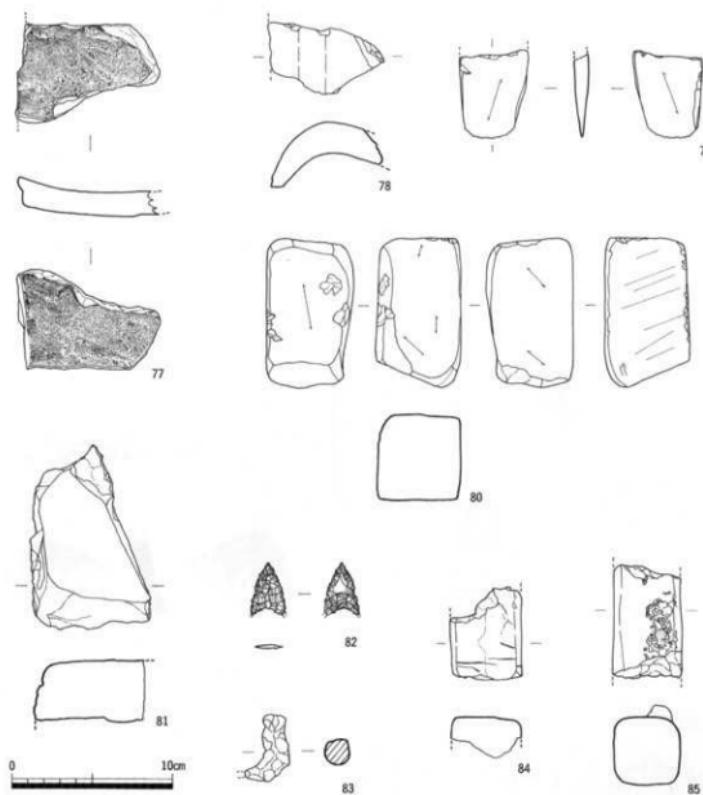


Fig. 39 A区遺物実測図 (1/3)

C区 2SD045



86

C区 2SD075



87



88



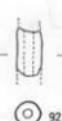
89



90

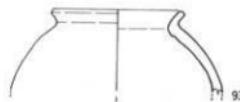


91



92

C区 2SD080



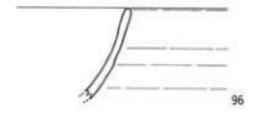
93



94



95



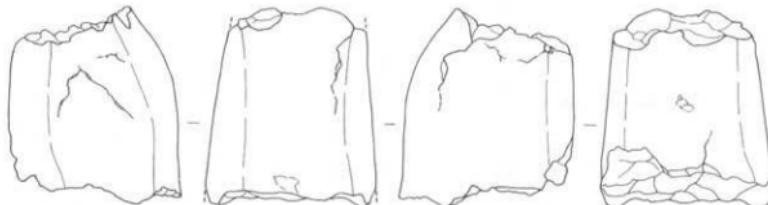
96



97



98



99

0 10cm

Fig. 40 C区遺物実測図 (1/3)

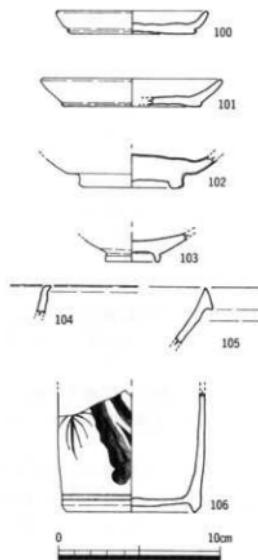


Fig. 41 C区遺物実測図 (1/3)

D区 2SD085

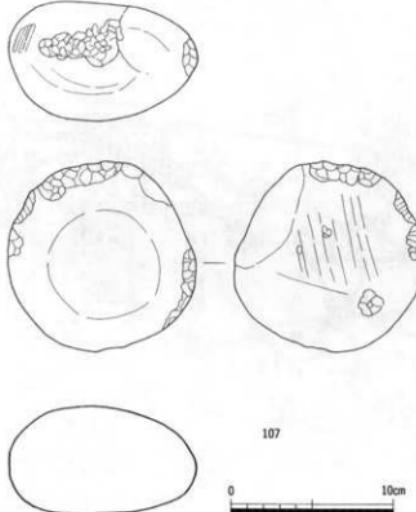


Fig. 42 C区遺物実測図 (1/3)

(4) 小結

ここではA区からD区までの検出された遺構と遺物について若干の所見を述べる。

A区で検出された2SK005、015の埋め甕については、大甕であり、肥料溜めや水等の貯蔵用の使用であったと考えられる。また、SD001から弥生時代の壺が出土しており、調査区南側の八女市が調査した室岡工業団地跡等では弥生・古墳時代の集落を検出しており関連が考えられる。

B区で検出された2SK025、030、040については杭痕跡がないか、遺物を含まない事や埋土の状況から落とし穴状遺構と考えられる。

C区やD区では多数の溝が検出されており、その多くは(2SD100を除いて)出土遺物から中世の溝であると考えられる。2SD100については第1次調査の所見と、D区の他の遺構との切り合い関係から弥生時代に埋没期を考える。

出土遺物については弥生時代から近世まで幅広く出土しており、特に近世の磁器(染付)に関しては市内出土資料が増加した結果となった。また、市内の中世以降の遺跡から出土する棒状土製品も出土しており、その性格について共伴する遺物から関連を考えなければならない。

IV. まとめ

今回の2次にわたる調査では前津地区での「むかし」の様子が徐々に復元される事となった。前津地区は市内の中でも比較的標高の高い八女丘陵上にその大部分が取まっており、現在までに5カ所で調査が行われた経緯がある。しかし、全て丘陵上の調査であり、今回調査地点は丘陵裾の調査であるため遺構の性格や時期については新たな調査事例となった。

調査地は昭和40年代後半に農地改良事業に伴う場整備が行われており、調査時には旧地形は残存していない状況であった。発掘調査では溝を多数検出しており、これら的一部分については旧地形の名残りであると考える。

第1次調査ではC区で繩文時代の層を検出し、石器を9点と早期の土器を出土しており、市中央部での確認は貴重な資料となった。また、B区の大溝1SD100は人工的な溝と考えられ、久恵町遺跡で検出した大溝と非常に近似した性格を持つ溝であると考えられる。また、1SP055、060、065ピットに関しては調査区外に展開する建物の可能性が考えられる。

第2次調査ではB区で落とし穴状遺構を検出しており第1次調査の縄文時代の遺物との関連性を検討しなければならない。C・D区では多くの溝を検出しており、2SD075、120では中世の食器や煮炊き具の出土が占めることから、近隣での当該期の集落の存在を想定したい。

今回の発掘調査は国道442号バイパス建設に係る緊急発掘調査であり、隣の八女市でも調査が行われている。調査地点は現在、入り組んだ市境になっているが、明治時代は「八女郡岡山村」として一つの行政単位であった。従って、八女市での調査結果も踏まえて、今後は広域的に遺構の性格や時期について判断をしなければならない。

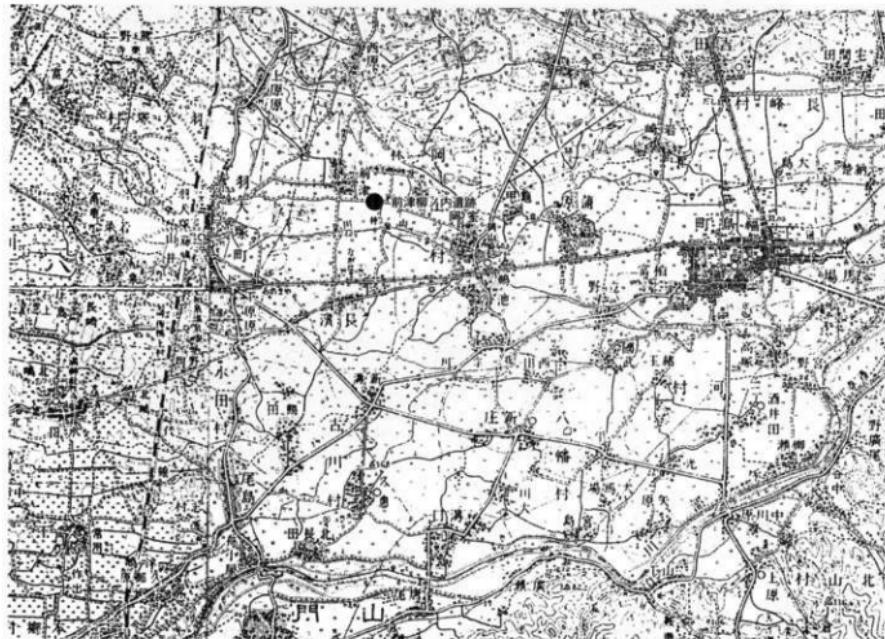
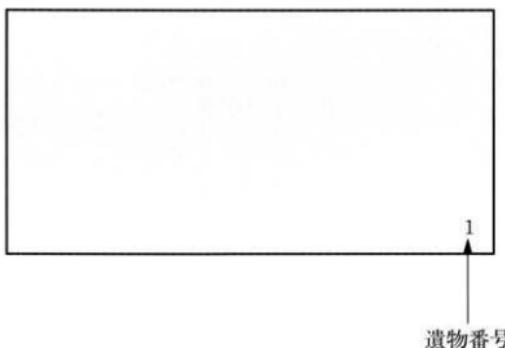


Fig. 43 調査地点地図 1/50000 (明治35年 大日本帝国陸地測量部作成)

PLATE

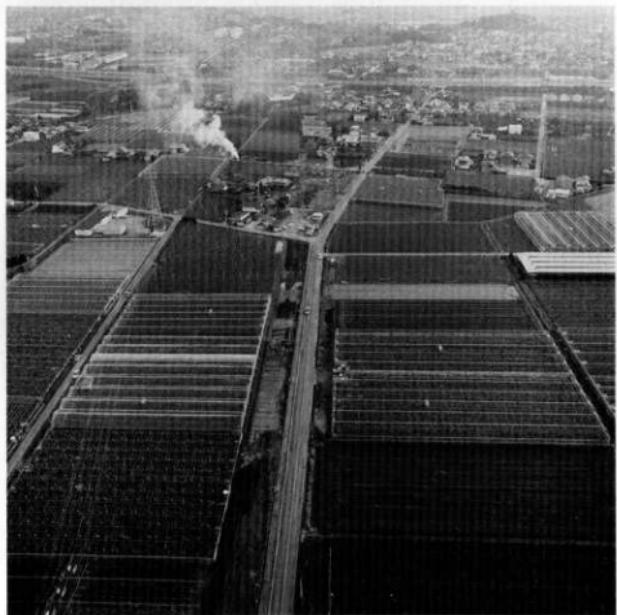
凡 例

遺物写真右下の番号は、以下のとおりである。



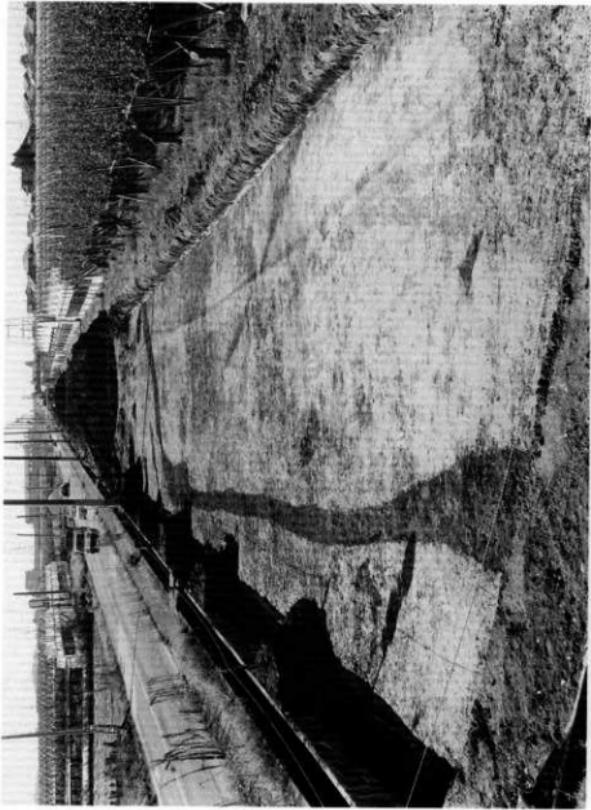


前津柳ノ内遺跡第1次調査 全景（東から）

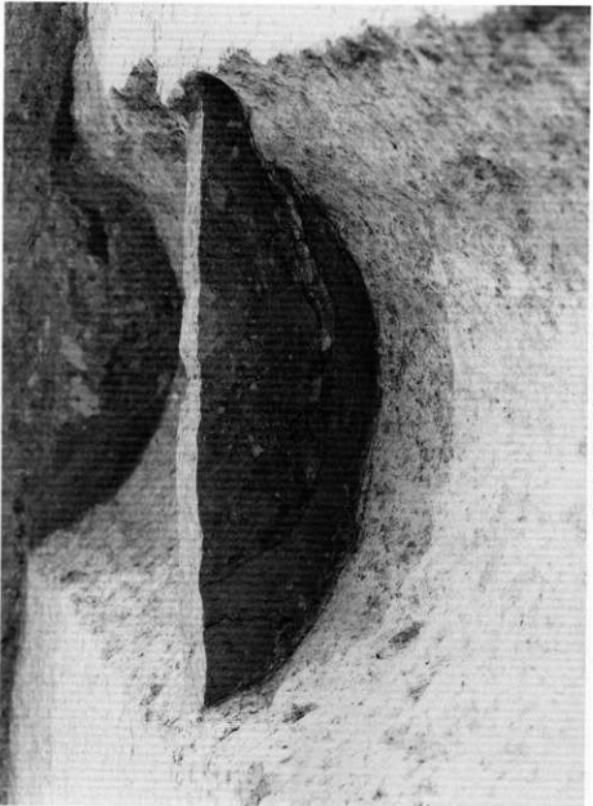


前津柳ノ内遺跡第1次調査 全景（西から）

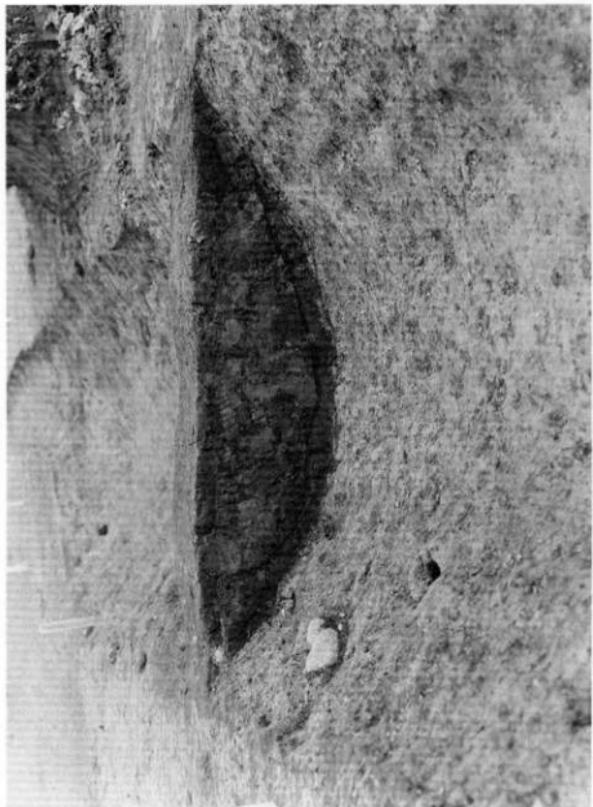
Pla. 2



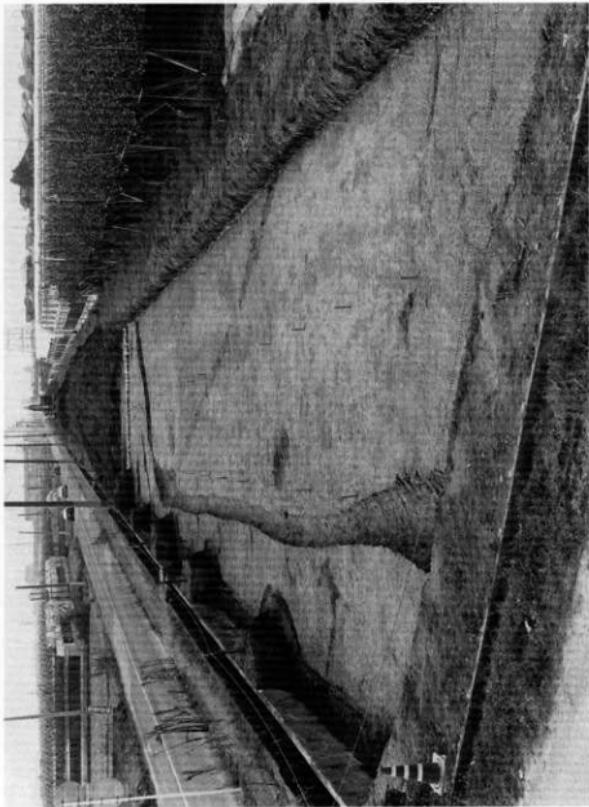
A区検出状況（東から）



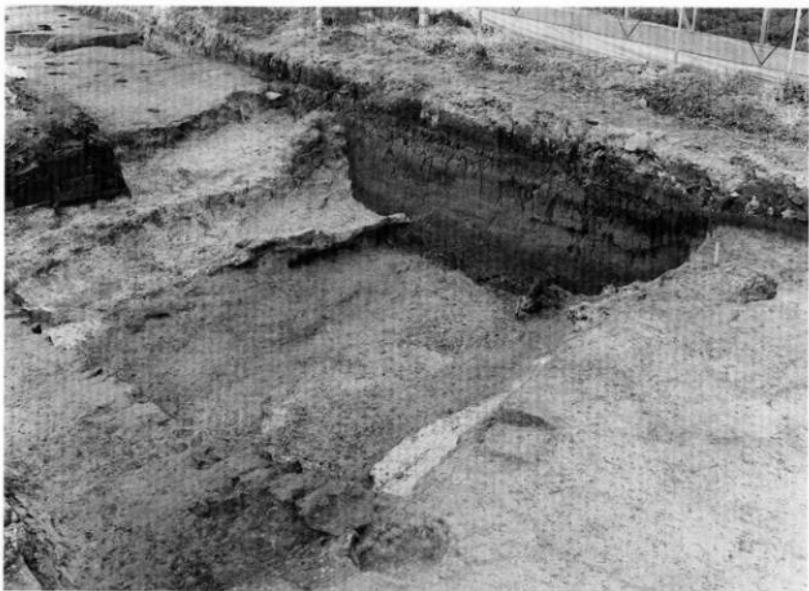
A区ISD001土質管溝（西から）



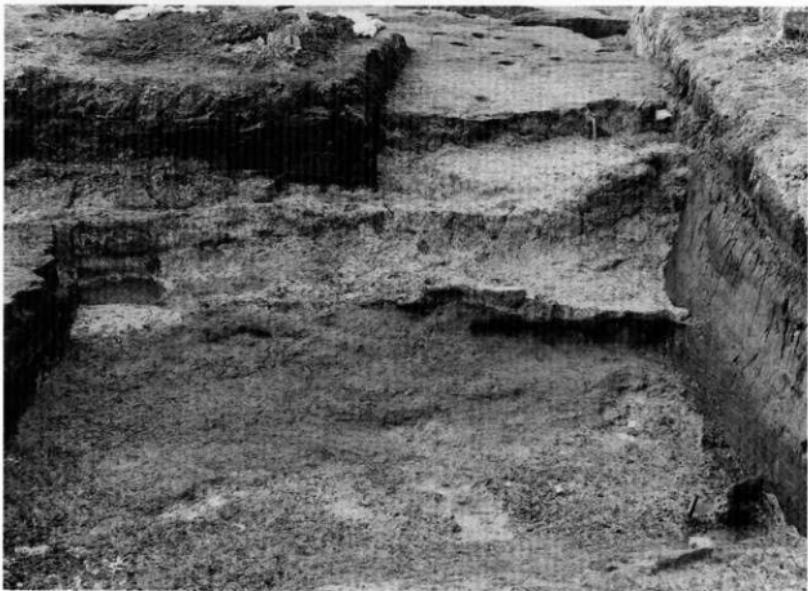
A区1SD001土層観察（西から）



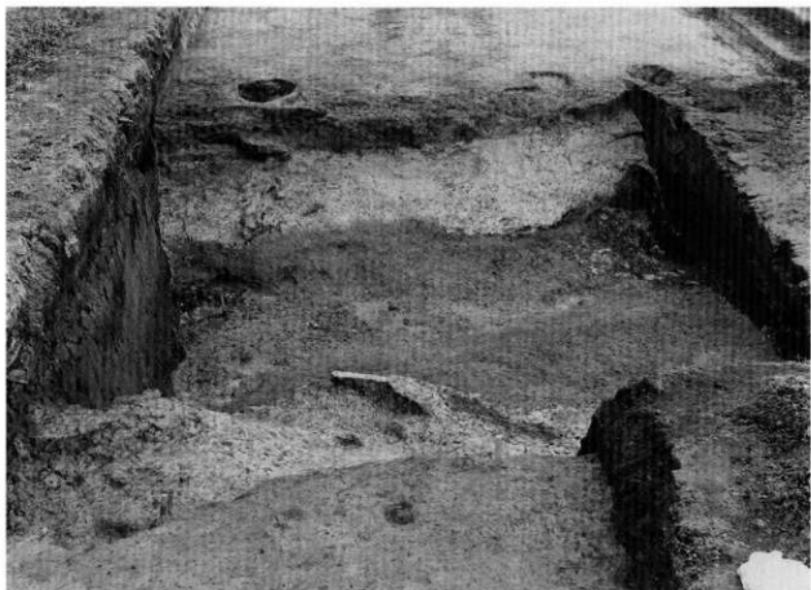
A区完掘状況（東から）



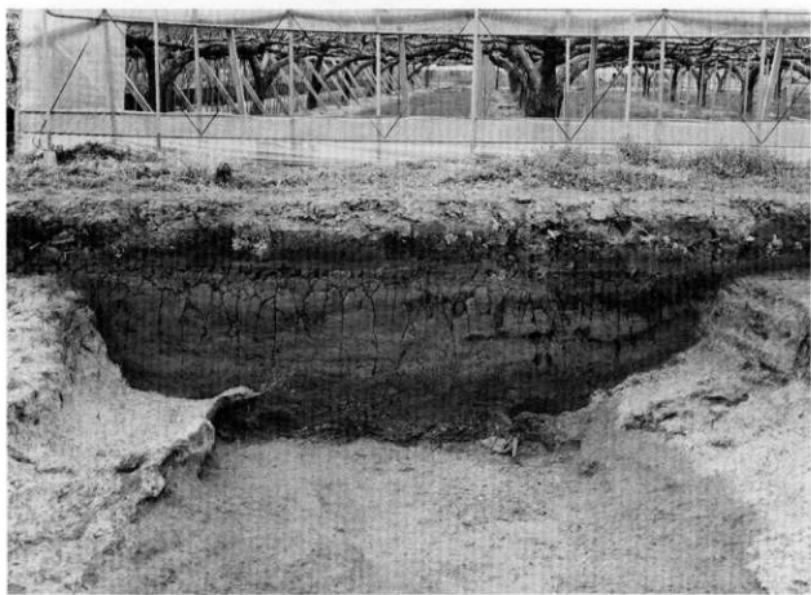
B区1SD050完掘状況（南東から）



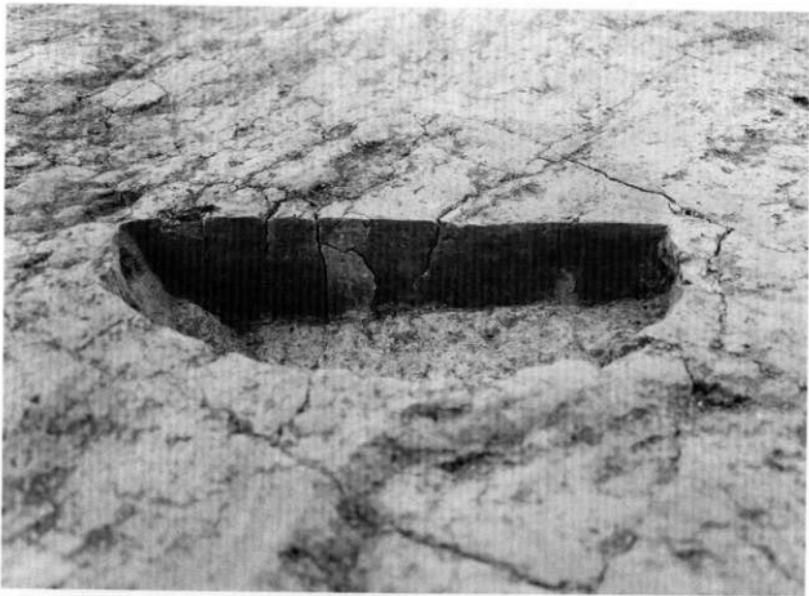
B区1SD050完掘状況（東から）



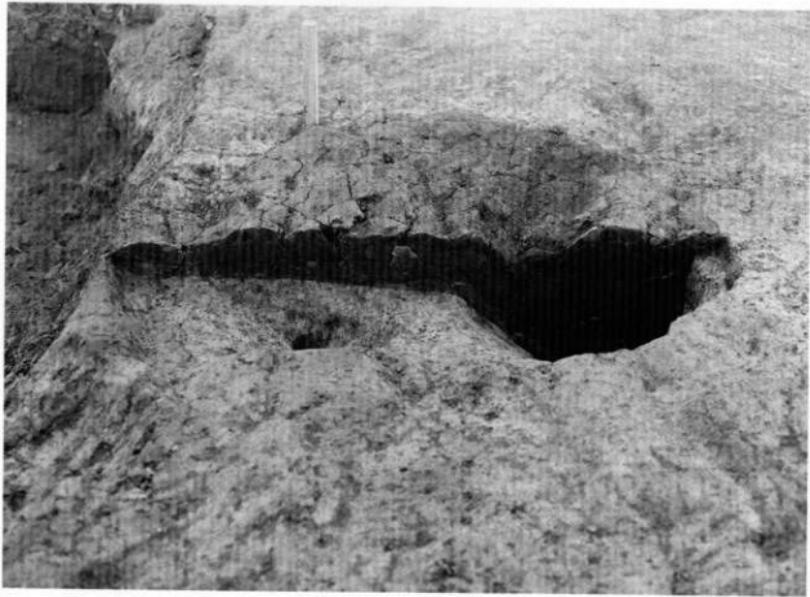
B区1SD050完掘状況（西から）



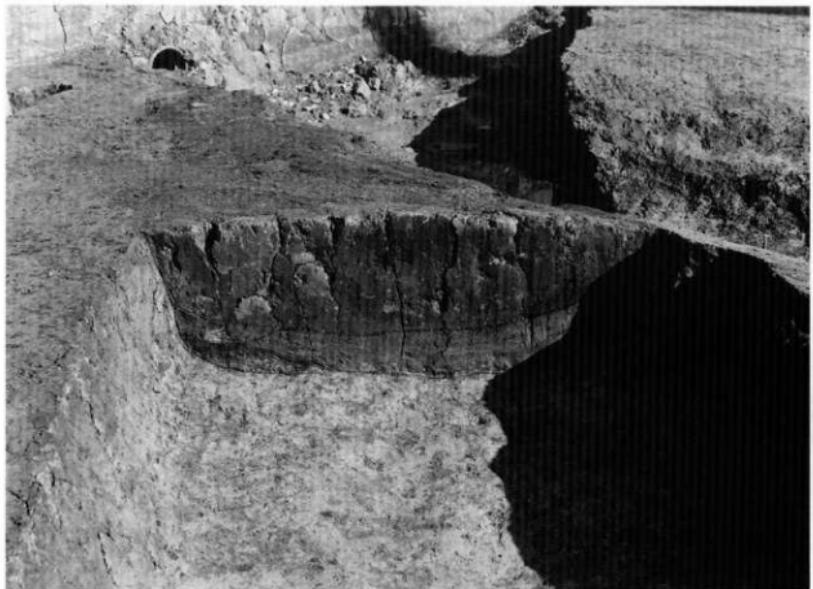
B区1SD050土層観察（南から）



B区1SP055土層観察（南から）



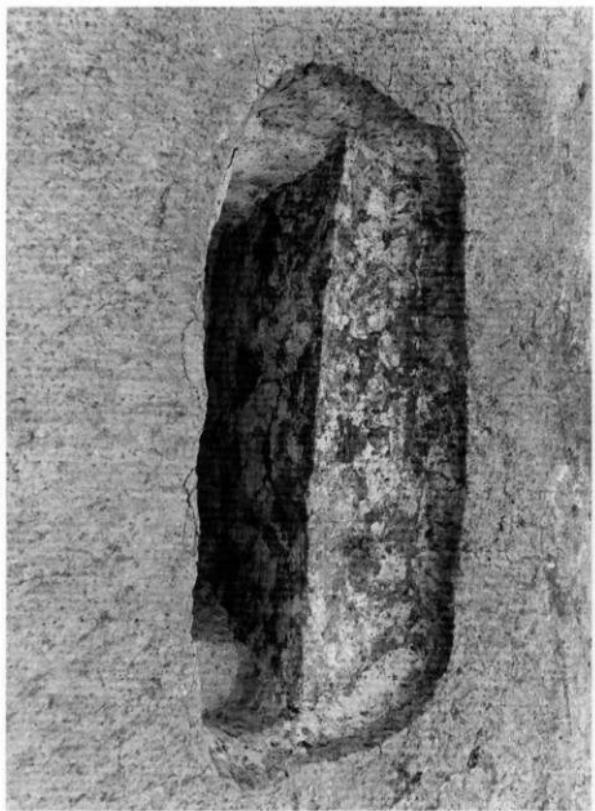
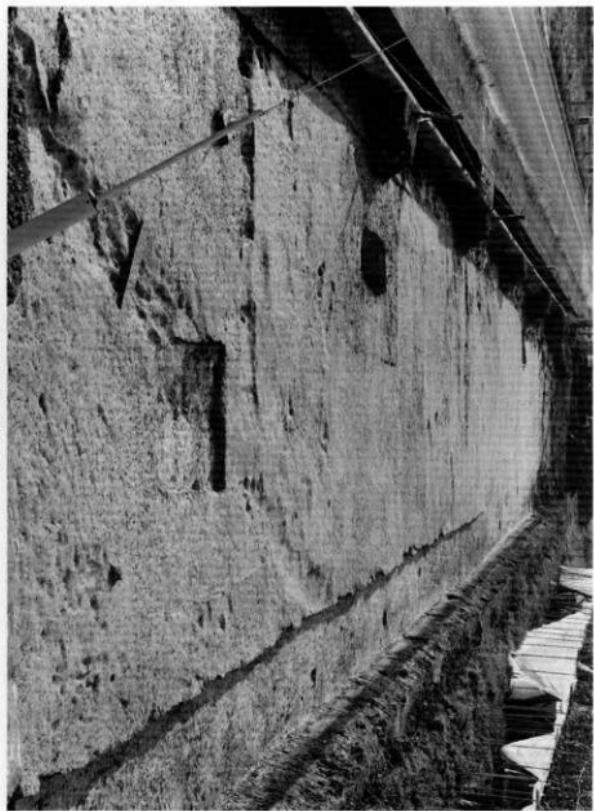
B区1SP060土層観察（南から）

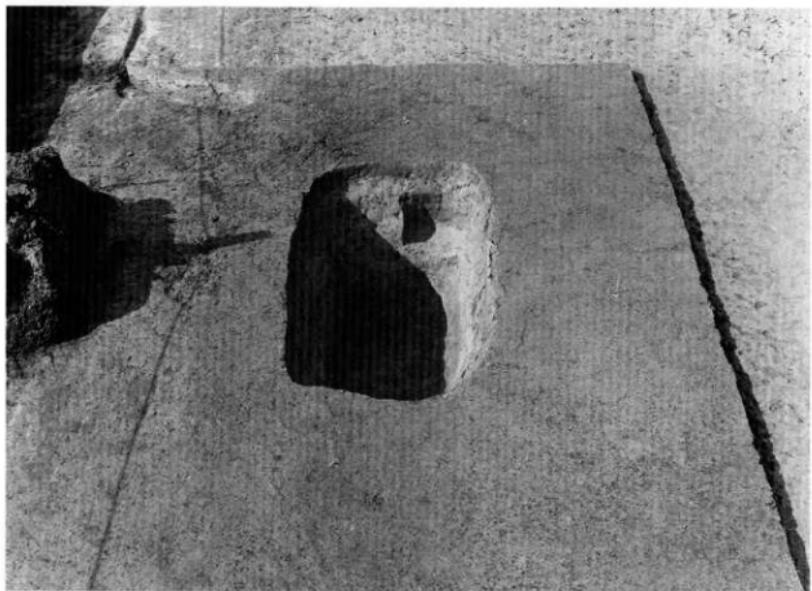


C区1SD100土層観察（南西から）



C区包含層 石鏃出土状況（北東から）





D区1SK150完掘状況（東から）



D区1SD155完掘状況（南東から）



前津柳ノ内遺跡第2次調査A区 完掘状況（西から）



前津柳ノ内遺跡第2次調査A区 完掘状況（南西から）



A区2SD001土層観察（西から）



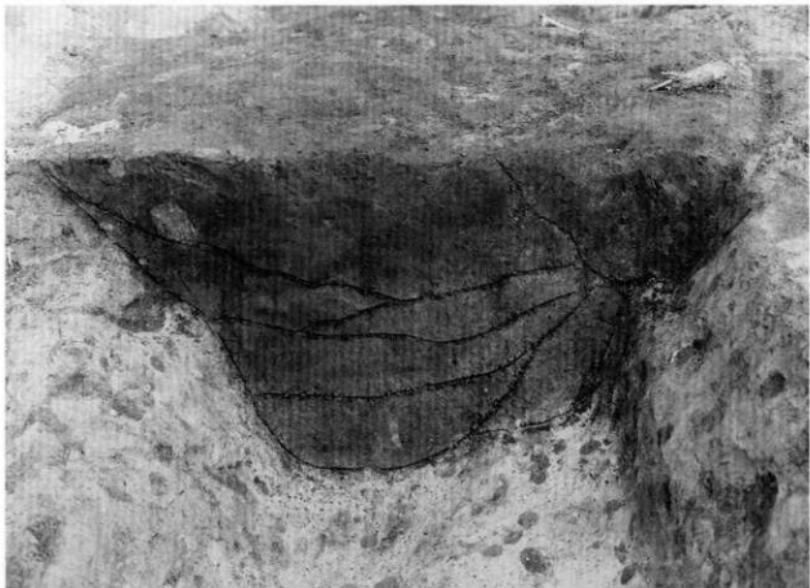
A区2SD010土層観察（西から）



A区2SK005 麻検出状況（南から）



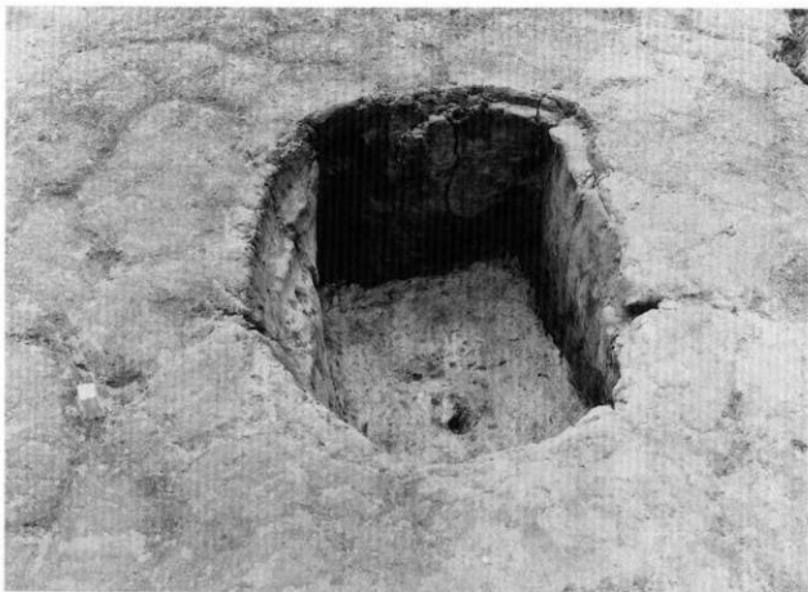
A区2SK0015 麻検出状況（南から）



B 区2SD035 土層観察（南西から）



B 区2SK025 完掘状況（西から）



B区2SK030 完掘状況（西から）



B区全景（北上から）



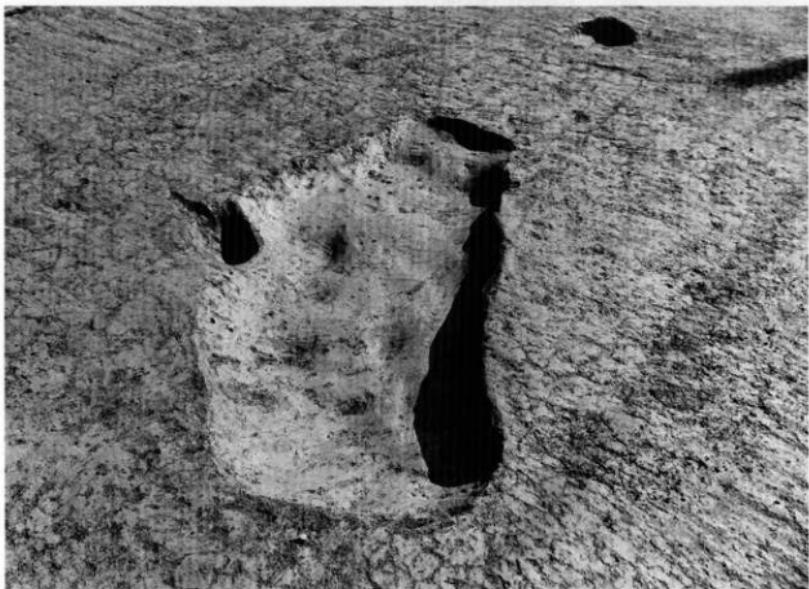
C区全景（東から）



C区全景（西から）

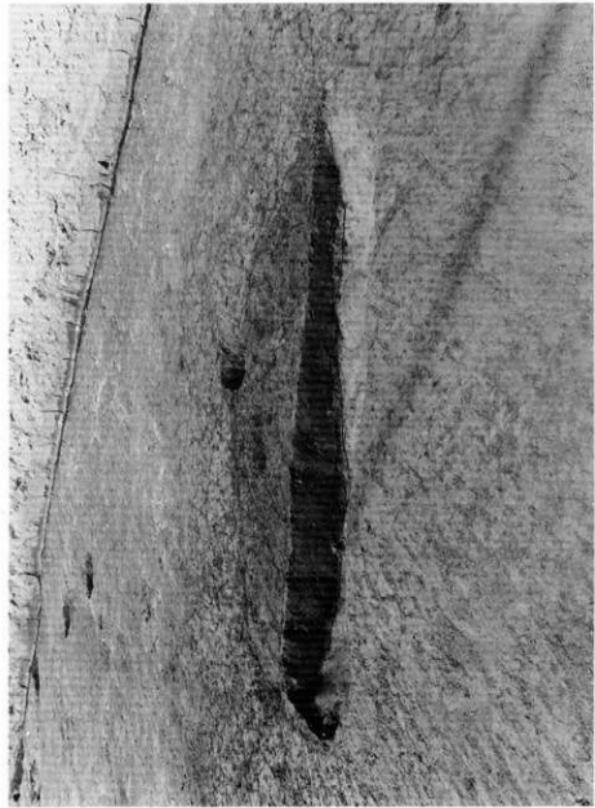


C区2SD080土層観察（南西から）



C区2SK070完掘状況（西から）

Pla. 17



C区2SK070土層観察（南から）



D区全景（西から）



D区東側調査区（北西から）



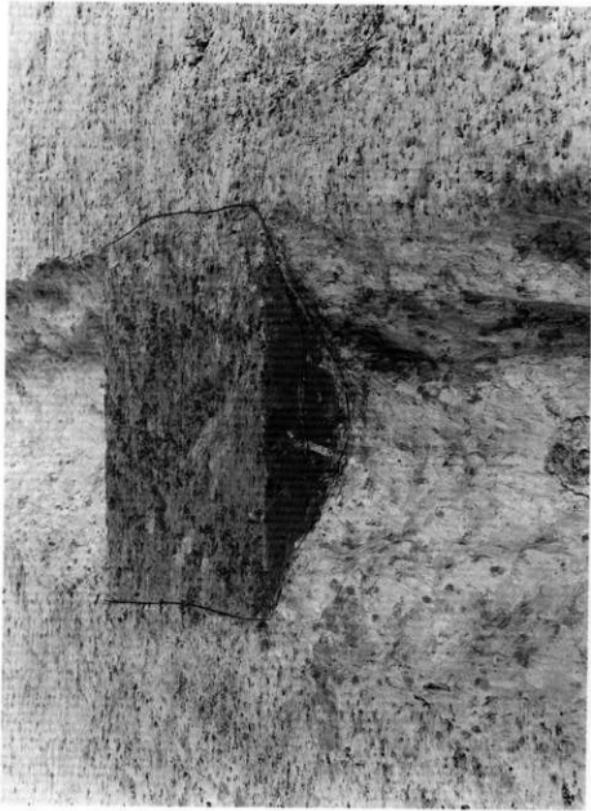
D区西側調査区（北東から）



D区完掘状況（西から）



D区完掘状況（東から）



D区2SD090土層観察（西から）



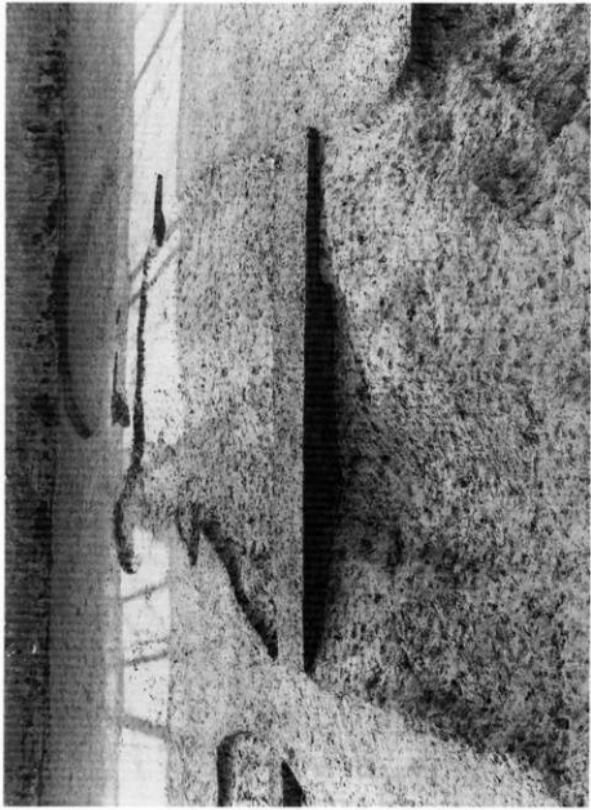
D区2SD100土層観察（北西から）



D区2SD100土層観察（北から）



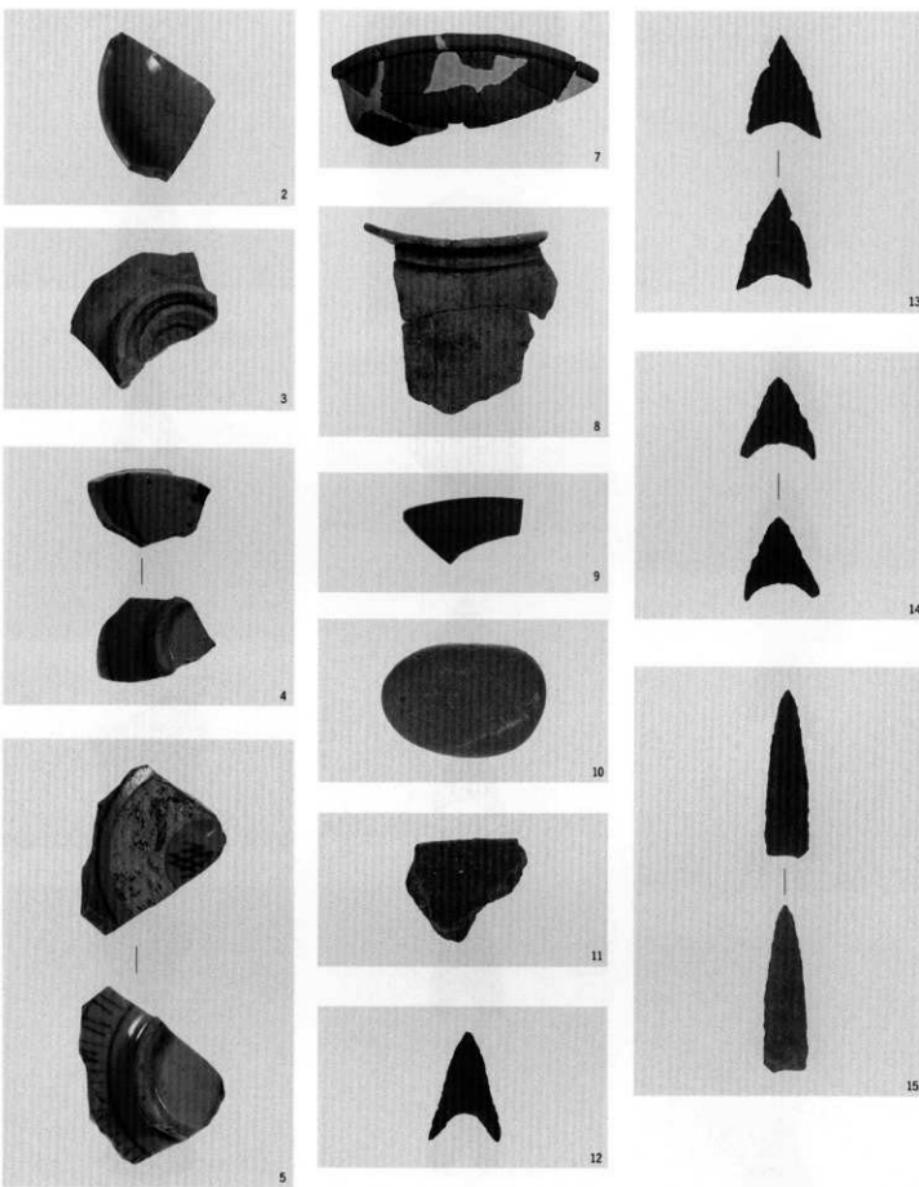
D区2SD120土層観察（東から）



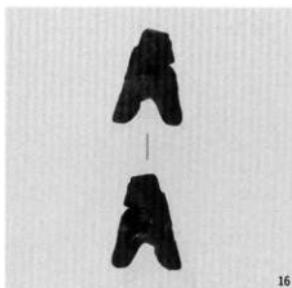
D区2SK063土層観察（北から）



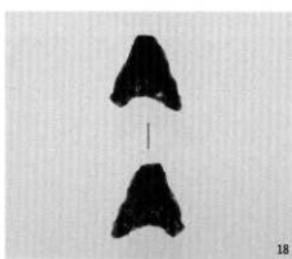
D区2SK064土層観察（南から）



Pla. 24

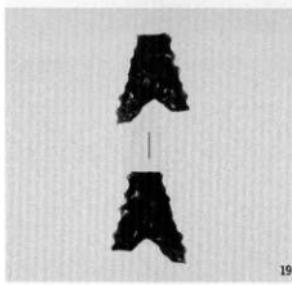


16



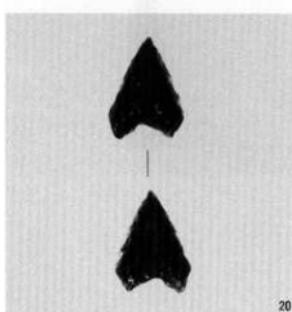
18

23



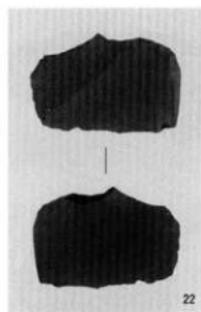
19

25



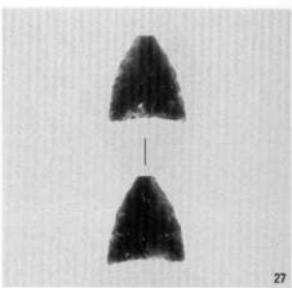
20

26

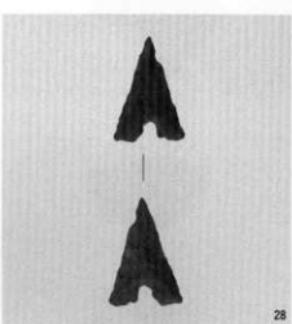


22

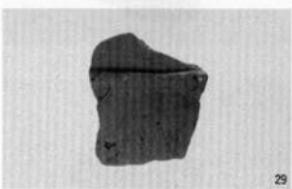
24



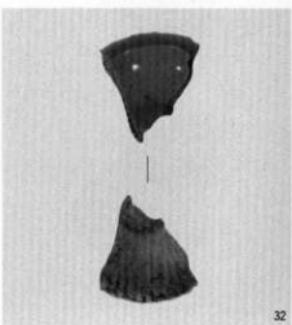
27



28

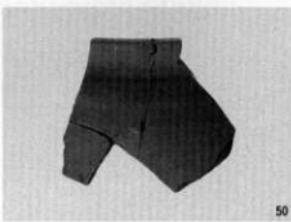
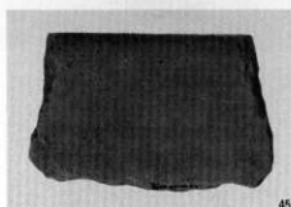
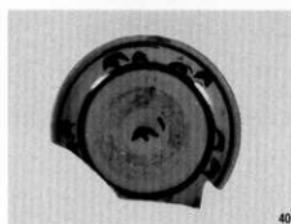
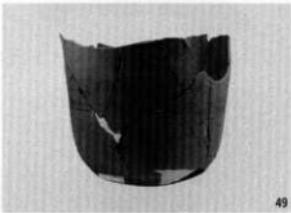
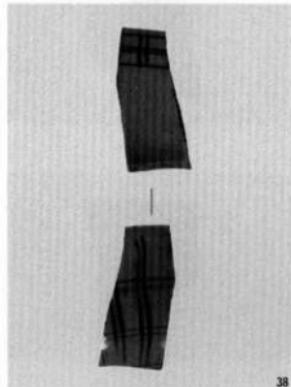
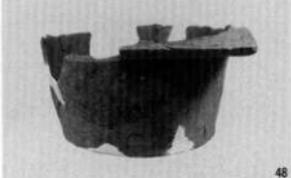
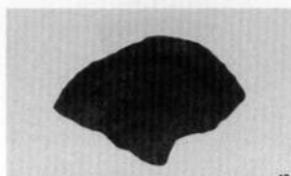
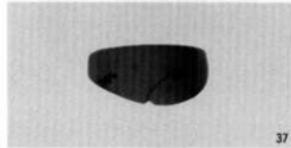
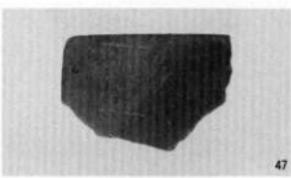
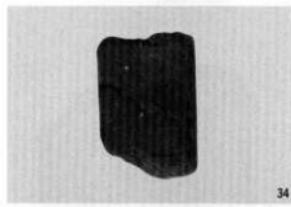
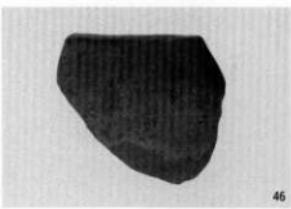
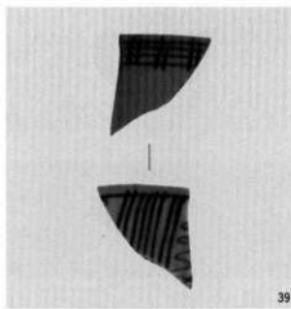
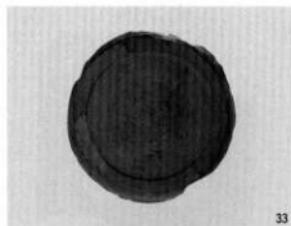


29

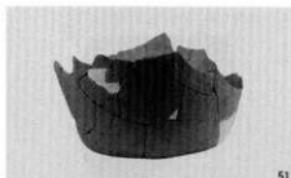


32

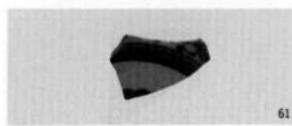
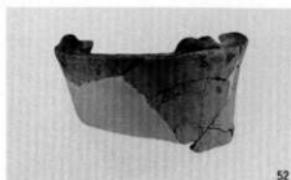
33



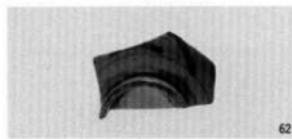
Pla. 26



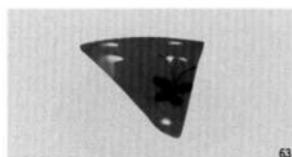
60



61



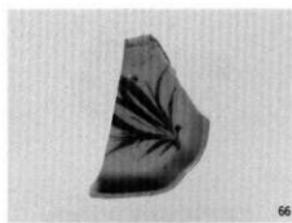
62



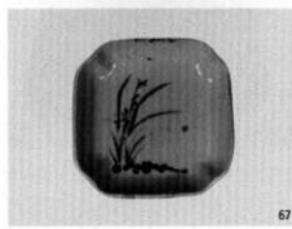
63



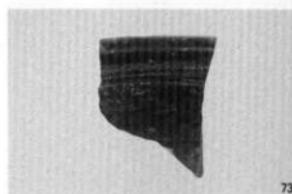
64



65



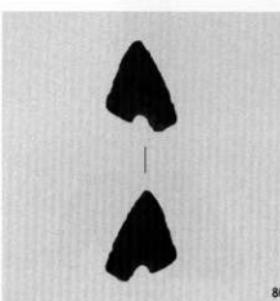
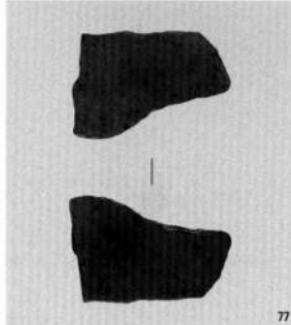
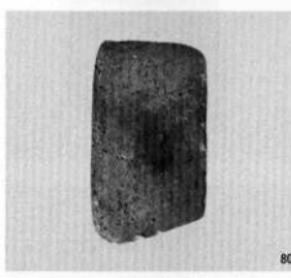
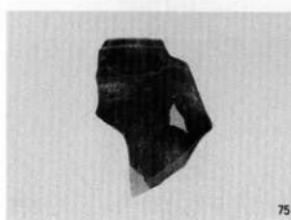
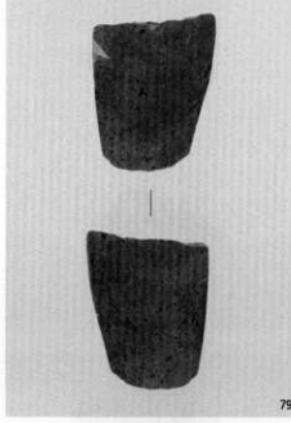
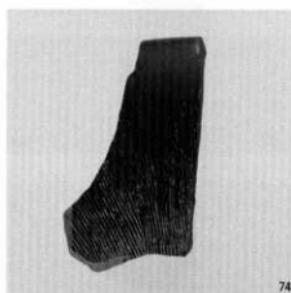
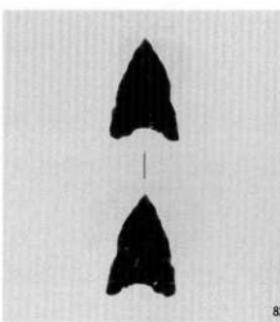
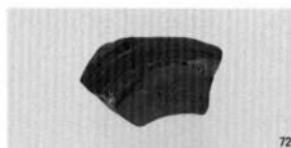
66

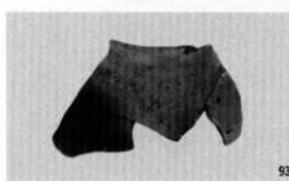
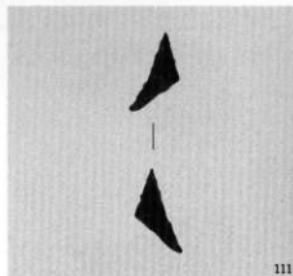
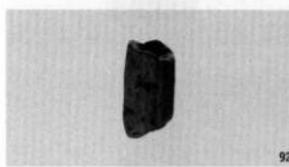
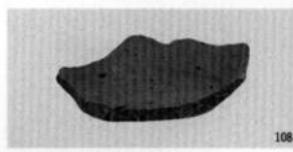
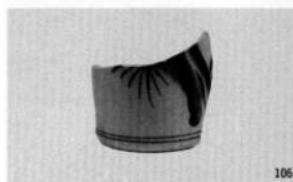
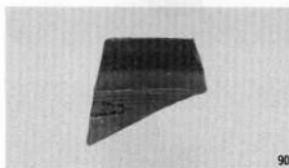
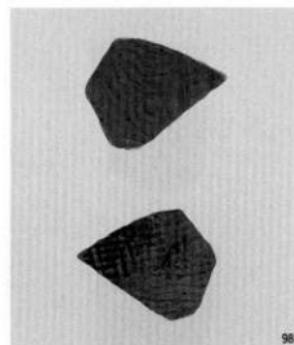


73



71





前津柳ノ内遺跡

筑後市文化財調査報告書

第55集

平成16年3月31日

発行 筑後市大字山ノ井898

筑後市教育委員会

印刷 大同印刷株式会社

佐賀市久保泉町大字上和泉1848-20